『貞操婦女八賢誌』 : 解題と翻刻(四)

著者	高木 元
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	52
ページ	27-68
発行年	2020-03-13
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006847/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

大妻女子大学紀要―文系―　第五十二号、令和二（二〇二〇）年三月

『貞操婦女八賢誌』――解題と翻刻――（四）

髙木　元

【キーワード】南総里見八犬伝、為永春水、二代目為永春水、人情本、稗史もの中本

前号に引き続き、『南総里見八犬伝』の改作である『貞操婦女八賢誌』三輯を紹介する。

本作は人情本風の三巻三冊で構成されており、読者対象を女性とした企画であったと思われる。だが、既述した通り、内容的には稗史小説と呼ぶべきもので読本の如き章回体様式を採用している。しかし、この三輯だけは五巻五冊と規格外の造本になっており、この点を「四編以下を嗣作した二世為永春水は、読本に近付けようとして、四編を五冊とするなど、それなりの努力は試みているが、初代春水の執筆した分をふくめて、偶然によりかかった事件の連続でストーリーは展開し、『八犬伝』の雄大な構想に及ぶべくもない。合巻風の作品であり、八賢女も、九編末尾の挿絵によってそれと理解される体のものである。」（『日本古典文学大辞典』四巻、岩波書店、一九八四。執筆は神保五弥）と酷評されている。

神保氏ら大正生まれ以前世代の近世文学研究者たちにとっての戦前からの桎梏（近世小説など国文学研究の対象にはならないと云う同調圧力）が存した時代背景を充分に理解しておく必要はあるが、それでも、我々は今、その不適当な位置付けや評価は糺して措かなければなるまい。

稗史小説は主として半紙本読本で担われたものである。そして、一般に中本型読本は世話読本が多く、洒落本からの流れを汲み、人情本への橋渡しとして位置付けられてきた。これで大筋は説明が就くのであるが、中本型読本にも稗史小説に近いものは存在していた。すでに述べてきたことではあるが、「人情本の元祖為永春水の『武陵埜夜話』三巻三冊（文政十一年）は匡郭を取り払った人情本風の造本ではあるが、色模様のない敵討物で、会話文を導入し愁嘆場を強調した作品である。同じく『小説坂東水滸傳』前後二編各三巻三冊（文政十三～十四年）は一名「千葉系譜星月録」とあり、千葉家の御家騒動を「星塚佐七、星合於仙、星井志津馬、星野正作、星川主水、星影利光、星石賢吾」の七人の活躍で解決するという構想の『八犬傳』模倣作である。［…］半紙本の史伝物を指向する作品も見られる。」（拙稿、第二章第一節「中本型読本の展開」、『江戸読本の研究』、ぺりかん社、一九九五。）また、この時期の人情本にも中本型読本的な伝奇性を残した作品も多かったのである。

とりわけ、この稗史小説的な中本を担ったのが為永春水であったといっても差し支えないであろう。つまり、中本という書型が保有する自由な実験が可能であった場において、世話読本たる人情本と

は別途の稗史小説へ向けた試みがなされていたと見ることが出来るのである。

しかし、半紙本と違って、中本五巻五冊という仕立ての前例はほとんど見られず、大半は一巻一冊、一巻二冊が多く、また一巻三冊という構成も見受ける。したがって、二代目の為永春水（もしくは板元）が第三輯（のみ）を五巻五冊にしたのは「読本風にする」ということを意図したものだとはいえない。むしろ、第一輯と第四、五輯は上下二帙に分けられており、実質的には各輯六巻六冊となっている（外題と内題の編数が齟齬していることは後の「巻端附言」でも触れられている）。ならば、初代から二代へと嗣作された時に、三輯（二巻六冊）に一冊分足りない稿本五冊のままで出板を急いだものとも考え得る。

一方、改作（リメイク）は所詮二番煎じで、原作が築いた確乎たる評判（商品価値）の上に成立しているのであるから、容易に原作を凌駕し得るはずもないし、その固有の〈文学的価値〉を原作と比しても無意味である。ならば、舞台の設定変更や構想趣向の転用などにその妙を見て評価すべきで、その意味で本作は、「南総里見八犬伝」を「武蔵〔国〕豊島〔家〕八賢女」として再構成したもので、実に良く出来た改作（リメイク）だと、むしろ積極的に評価出来ると思うのは僻目であろうか。

それかなしか、後摺本も流布してるし、何より明治になって実に多くの活字翻刻本が出されていることからも、良く読まれていたものと想像できる。

【書誌】 三輯（五巻五冊）

書型 中本 十八・六×十二・五糎

表紙 丁子色水色白色地に縦縞飾模様

外題 左肩「貞操婦女八賢誌 編壹（〜五）」（十三・三×二・七糎）。題簽の上部（花を白抜き）から柿色、下部（船を白抜き）から空色のボカシを施す。

見返 なし〔白〕

序 「柳北（りうほく）の釣夫（てうふ） 為永春水記」（序一オ〜序二オ）

口絵 第一〜三図 見開き三図（丁付なし）。濃淡の薄墨を施す。

内題 「貞操婦女八賢誌（ていさうおんなはつけんしさんしふ）三輯巻之一（〜五）」

尾題 「貞操婦女八賢誌三輯巻之一（〜五）終」

編者 「東都 狂訓亭主人編次」（内題下）

畫工 記載なし

刊記 なし

諸本 館山市博・早稲田大・西尾市岩瀬文庫・山口大棲妻・東洋大・東京女子大・三康図書館・千葉市美。

翻刻 （一）参照

備考 この三輯だけが五巻五冊となっている。なお、後印本の詳細な調査報告については後日を期したいが、千葉市美蔵本の三輯五巻巻末には刊記「長次郎事（大坂心齋橋筋博労町）勸善堂春水撰／四郎兵衛事（同心齋橋筋南久太郎町）歌川國直画圖／善次郎事（江戸京橋弥左エ門町）溪齋英泉画圖／弘化二年乙巳歳／書肆 河内屋茂兵衛／同 秋田屋市兵衛／大嶋屋傳右衛門板」が附されている。

【凡例】

一　人情本刊行会本などが読みやすさを考慮して本文に大幅な改訂を加えているので、本稿では敢えて手を加えず、可能な限り底本に忠実に翻刻した。

一　変体仮名は平仮名に直したが、助詞に限り「ハ」と記されたものは遺した。

一　近世期に一般的であった異体字も生かした。

一　濁点、半濁点、句読点には手を加えていない。

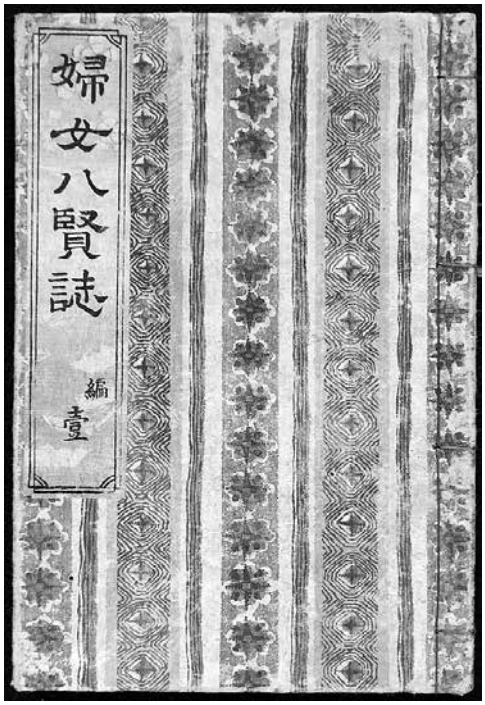
一　明らかな欠字や誤記の部分は、原文の近くに〔　〕に入れ私意で補正を示した。

一　丁移りは」で示し、各丁裏に限り」゛のごとく丁付を示した。

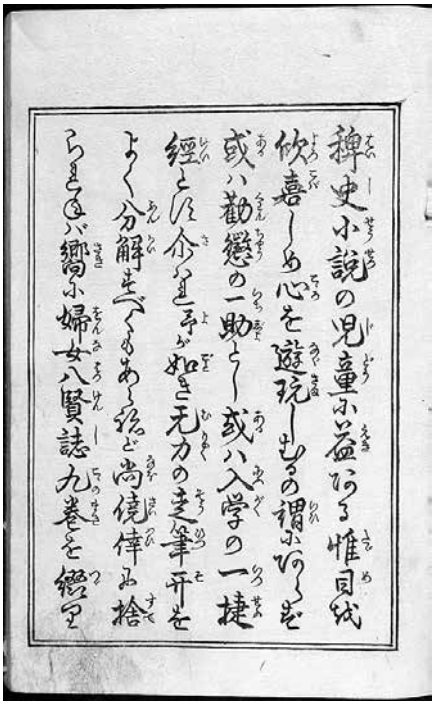
一　底本は、保存状態の良い善本であると思われる館山市立博物館所蔵本に拠った。

【付記】翻刻掲載を許可された館山市立博物館に心より感謝申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費JP17K02460の助成を受けたものです。

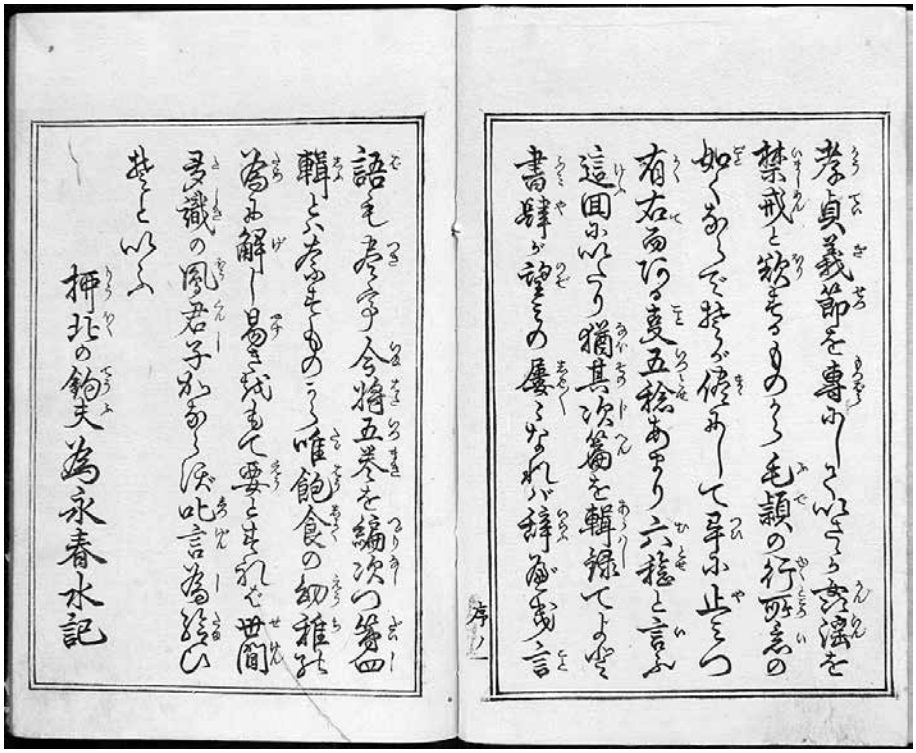
【表紙】五冊とも同一意匠



【序】



稗史小說の児童ハ益なく惟見物
飲喜しむ心を遊玩しむるの謂ハ
或ハ勸懲の一助と〜或ハ入学の一捷
經とは今迄手が如き无力の走筆乎を
よく分解せ〜くもあ〜ねど尚僥倖み捨
らるゝバ嚮ハ婦女八賢誌九卷を編ム



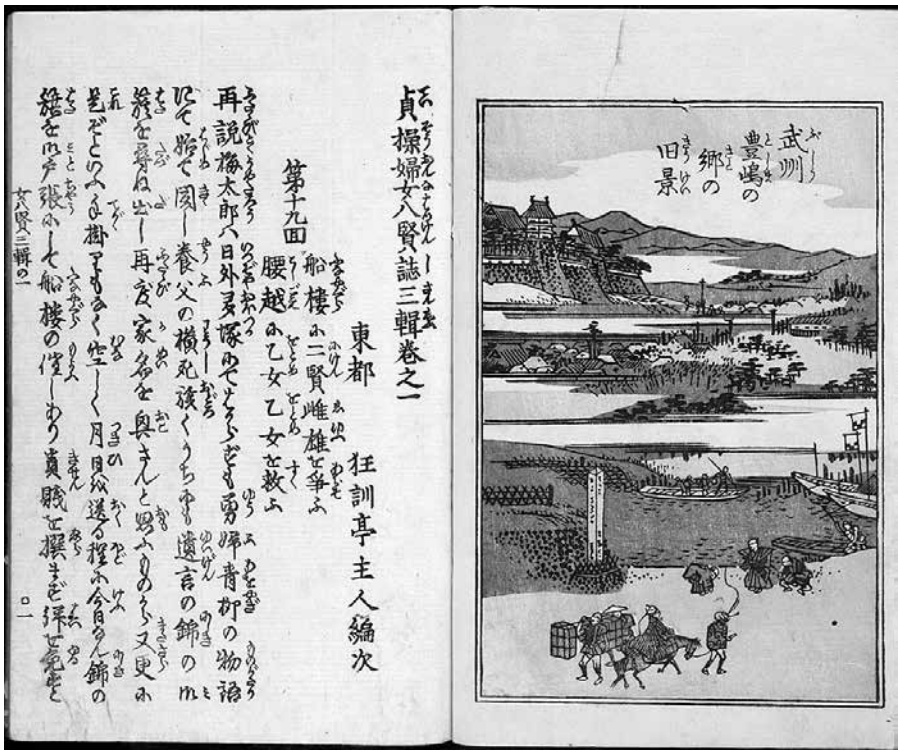
稗史小説の児童に益ある惟目を欣喜しめ心を遊玩しむるの謂にあらず或ハ勸懲の一助とし或ハ入学の一捷徑とす尓はれ予が如き无力の走筆开をよく分解すべくもあらねど尚僥倖に捨られねバ嚮に婦女八賢誌九巻を綴り」孝貞義節を專にしていさゝか姦淫を禁戒と欲するものから毛頴の行所意の如くならでそが儘にして早に止みつ有右而ある叟五稔あまり六稔と言ふ這囲にいたり猶其次篇を輯録てよと書肆が望みの屢〻なれバ辞べき言」序一語も盡て今将五巻を編次つ第四輯とハなすものから唯飽食の幼稚の為に解し易きをもて要とすれば世間彡識の鳳君子かならず叱言為給ひそといふ

柳北の釣夫為永春水記」

【口絵第一図】丁付なし
腰越の阿安

【口絵第二図】丁付なし
「勇婦於道」「奇婦阿多毛」／汐木焚く煙りの末や雲のみね
騒がしき軒の柏や今朝の冬／「神宮屋平左ヱ門」「夕塚の知縣大六」

【口絵第三図】丁付なし
武州豊嶋の郷の旧景



貞操婦女八賢誌三輯巻之一

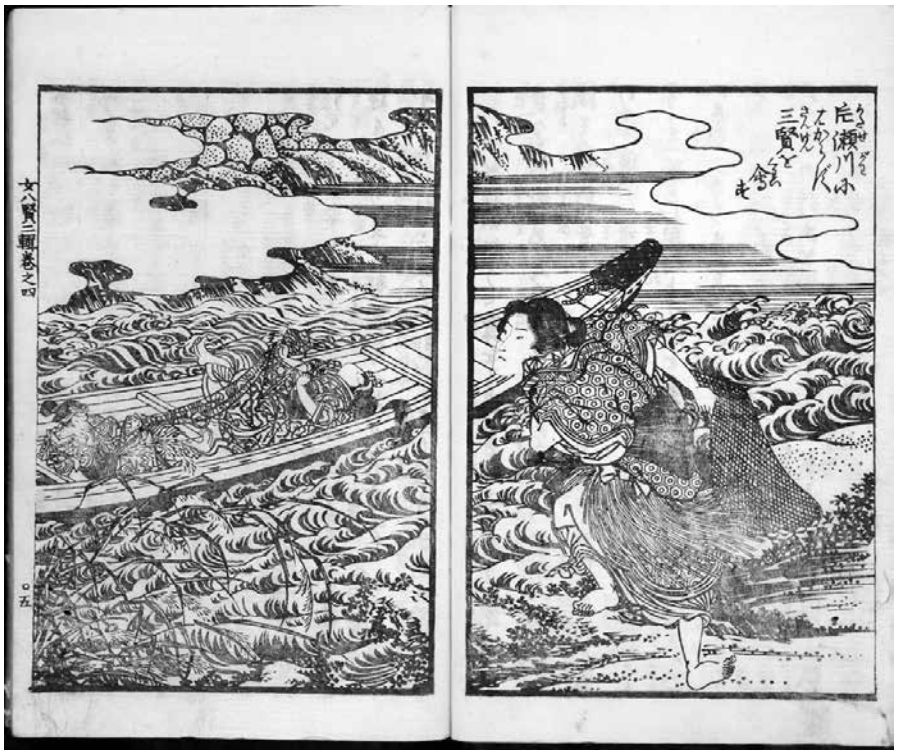
東都　教訓亭主人編次

第十九回

船楼に二賢雌雄を争ふ
腰越に乙女乙女を救ふ

再説梅太郎ハ日外夛塚にてはからずも勇婦青柳の物語にて始て聞し養父の横死駭くうちにも遺言の錦の御簇を尋ね出し再度家名を興さんと思ふものから又更に是ぞといふ手掛りもなく空しく月日を送る程に今日なん錦の簇を御戸帳にして船楼の催しあり貴賤を撰まず拜を免すと」港の風説もつぱらなれバ是ぞ得難き倖ひと心強くも只一個三重の樓に錆りある錦の御簇を奪ひ取りさゝゆる仕女を数十個か或ひハ敲すゑ投仆し又取つくを蹴かへして圍みを脱れんと働けども如何せん階子の下にハ數多の下仕の女中達手に手に得物を引提て討て取らんとひしめくにぞ脱れ去るべき道のなけれバ其所に必死をきわめたる程もあらせず八代とか名乗て樓へ登り來る捕手の處女ハ折容たる色なく那三重の二重目まですら〳〵と走登り樓をきつと見あげつゝ夫なる女中に物言ん當時鎌倉に並びなき音領さまの御内君花の方の催しある此船樓に憚りなく」[1]登りて騒がすのみならず錦の御簇を奪はんとハ身の程知らぬ不敵者豊嶋の残黨と聞からハ猶ゆるされぬ覚期して此八代が縛を敏く受よと喚はりつゝ第三重目の樓へ飛鳥のごとく駈登るをお梅ハ見つゝ些とも騒がず身繕ひして打含笑忠孝ふたつを身ひとつに思ひ込たる此梅を

假令数百の軍勢にて十重廿重に取巻とも物の数とも思はぬをいらざる女子の腕立せずと怪我せぬ先に降伏りやと言はれて八代冷笑ひ旡益の問荅せんよりハ縛うけよと言ゝも准備の十手を振あげてヤット聲かけ打かゝるをお梅ハ寄せじと身をひそめ透をうかゞひ砍つくる刄を潜つて八代が組んとするを組せじと互ひに爭〔そ〕ふ虚〻実〻這方ハ十手那方ハ」短刀一上一下と砍むすぶ双方劣らぬ働きハ最目ざましくぞ見へにける恁てある事半响ばかり尓ども勝屓ハ見へざりしがいかにや爲けん打合ふはづみにお梅が持たる短刀の鍔元よりして折るにぞ八代得たりと打込む十手をはづして引組むお梅が早速心得たりと八代も十手を投捨組合ふて上になりまた下になる最も危ふき折こそあれ俄に暴風吹起り荒波はげしく立程にさしも大そうに造り立し三重の樓船も何かハもつてたまるべき瞬間にくつがへり大浪の中へ打込れて何所ともなく流されける其中にお梅八代の両勇婦ハ組合ふたるそのまゝに」[2] くつがへる船と諸侶に高樓より轉び落ち千尋の底にしづみしと思ひの外響にお梅が乗來りし小船の中へ倖ひにも二個一所に落しかども斯まで荒き波風なれバ須臾も其所に猶豫ず且高き樓より轉び落し支なれバ両個ひとしく息絶して艫艈をあやつるにあらざれバ浪のまに〳〵吹流され行衛覚めずなりにけり前話休題 爰に發説鎌倉の西にあたりて腰越といへる一村あり鎌倉よりハ道も僅に隔〔た〕りけれバ常に住む人も稀にして世に繕ひなき片鄙なり這に一箇の賢女ありて名をバお安と喚れ」けるが双親ハ世を早く去りて孤となりしを里人の爲に育られ成長にしたがひて容顔の美麗なる卞氏が玉をもあざむくべく姿形のやさしき事春にあへる楊柳のごとし今年僅に十七なれども其才ハ老女も及ばず且力あくまで強く武藝の道にも賢けれども常にハ殊に柔和にして仮にも仁と爭はねバ村中ハ言ふもさらなり近郷まで も聞傳へて誉ざる者もなかりしかバ或ひハ娵に貰ひたし聟になりたしなぞ言ひ入るゝあれバ又ハ好色の若郎等ハ是が爲に胸を焦し言ひ寄る者も多かりしかども如何なる事にや此お」[3] 安ハ只能程に断りて聟をも求めず他にも嫁せず况浮たる支なぞハ聊見かへる事もなく其身ハ片瀬川へ網を入れ漁するを行業として細き烟りを立つゝも世を最易く送りけるが這日ハ殊に空晴て波風ともに静なるに心におもふよしもあれバ早朝より船を乗出し片瀬川を上流下流と網を入れつゝあさりまはれど小魚すこしを得たるのみにて尓ばかりの猟もあらねどされバとて又他を求めず一個小船の中に在て身の行末を思ひめぐらし默然として居る折しも俄に沖の方に當りて暴風はげしく吹起り最凄ましく見ゆる」**【挿絵第一図】**」[4]」にぞお安ハ船を芦間に漕入れ須臾風間を待つゝも空打ながめて居たりける斯る折しも川下より忽然として一ッの小船浪に引れてたゞよひ來つおなじ芦間へ流れ入るにぞ於安ハ見つゝ怪しみながら近寄るまゝによく〳〵見れバ年の頃十七八かいまだ廿才にいたらざる容貌やさしき二個の處女何れも身輕き衣装なるが組合たる侭船底に仆れて息ハ絶てあ



【挿絵第一図】片瀬川にはからず三賢を會す

りお安ハいよ〳〵駭きつゝも思ひ合する夏あれバ艅を逆手に取り直し那船縁へ打かけて這方の船に引付つゝおなじ所に繋ぎ止め扨那船に乗り移りて二個の體をさぐり」[5] 見るに聊呼吸の通ひあるにぞ准備の薬を口にふくめ先其一個を呼び生る夏十聲ばかりに及びしときアット言ひつゝ息吹かへし四辺を烏鷺さゝ見まはして忙然たる事半晌ばかり須臾言語もあらざりしをお安ハ見つゝ打含笑如何お心付ましたかお怪我ハなきかと介抱バ件の處女ハ不審氣に何処のお方か知らねどもついに見馴ぬ吾女が情ハ嬉しきやうなれど若やお前も敵方のと疑ふ言語をおしとゞめ吾倩ハ爰より程遠からぬ腰越村に成長網引の業に世を渡る安と呼るゝ賤しい者最前俄の大暴に波を凌ぎに此芦間へ船をかけると」程もなく風随来りしひとつの小船中にハお前と是なるお女中組合ひながら氣絶の様子不審ながらも捨おかれねバお前を先へ呼び生て様子を聞た其うゑにて此お女中をも介抱し及ばずながらお二個のお心の和らぐやう爲やうと思ふて此仕合せ別に子細ハござんせねバ吾倩にお心置ハない隠ましからぬ夏ならバ具に様子を語り給へと赤心面に顕はれしお安が言語をつく〳〵聞て處女ハ心安堵たれども猶疑ひハ晴れがたく言んと為つゝ猶豫をお安ハ推して打点頭お前の疑念ハ然事ながら岸をはなれし此船なれバ他に洩聞者もなし品に」[6] よりてハ這方からもお話いたす子細もあれバ假令はゞかる事ありとも枉て打明け語りてよと再度問はれて那處女ハ須臾思按の躰なりしが四辺を見

まはし言語を密め心ありげなお前の言語斯念頃に問ひ給ふを言はずハ恩義を弁へぬ仇し女子と思はれん世に隠ましき支ながら吾侍ハ豊嶋の家臣何某が處女なれども實父の上ハ先置て産にも増て恩深き養父といふハ武藏なる多塚といふ里の長杢兵衛と称者なりしが領主平塚家の内命にて越の長尾へ密使の大役首尾よくなして帰る路松井田宿の野中にて扇が谷の」捕手に出合ひ遁れぬ所と戰ひしかども那方ハ多勢這方ハ小勢殊に老木の杢兵衛なれバ終に其場で命を落し夫のみならで大切なる錦の御簇その上に沙金巨夛を失ひたれバ豊嶋の家を再興の便宜を其所に失ふて又詮術もなきものから尓とて片時も捨置れねバ義婦青柳と心を合せ吾侍ハ遠く木柴苅る此鎌倉に忍び居て御簇の在所を尋ねしに今日舩樓の催しハ得がたき此身の倖ひと思へバいとゞ嬉しくて心太くも只一個那舩樓に走登り首尾よく御簇ハ手に入りしかども数多の女中に捕圍まれ殊に」[7] 是なる八代とか名乗りし處女の武勇力量終に刄を打折られ互に組合ふ折こそあれ俄の風に舩くつがへり那三重の樓より轉び落ると思ひしのみ夫から先ハ何様なりしか知らで這所まで吹流されお前の情に蘇生し御恩ハ譬へん方もなく身を粉にするとも此恵みを報はにやならぬ義理なれども既に御簇の手に入上ハ片時もはやく豊嶋家へ携へ行て亡父の先の恥辱を清がねバ遺言うけし此梅が草葉の蔭へ言訳なし吾侍が功なる其上ハ身を犬馬の労にかへてもかならず御恩を報じます斯ういふうちも心急く捕手の女中の蘇生らぬ先少しも速く此場を

と言つゝ」お梅が立あがるをマァ〳〵待てお梅さん吾侍が一言いふ事ありと言ひつゝ這方に仆れ臥たる那八代が起あがるを見るより於梅も又お安も駭き騒ぐを八代がおし鎮めつゝ形容をあらため知らぬ支とてお梅さん嚮にハ恩あるお前に對し危ひ事でござりましたと聞てお梅ハ不審顔吾侍に恩を受たとある左様してお前の身のうゑハと問ひかへされて八代ハ涙にうるむ目の縁を袖にて卒度打覆ひ言ふも面なき支ながら吾侍が実の爺さんも多塚村の百姓にて名を籾七と呼れつゝ貧しき者で侍りしが三年塚の大病に家財も田畑も賣」[8] 盡し斯ても足らぬ年貢の未進欺いて見ても聞ればこそ那強慾な大六殿終に无慈悲に爺さんを牢の中につながれて日毎に不納を責らるれバ只さへ病苦のそのうゑに呵嘖に合ふハ須臾もたもたず僅半月たゝざる間に牢の中に死去〔り〕給ひ尓ども非道の大六殿猶飽足らでや吾侍等まで牢に入れんと言はれしをお前の親御杢兵衛さまのさま〳〵に執成給ひ苛き命を助りても在所に住居もならざれバ吾侍の丁度七才のとき嚊さんと只二個住も馴たる多塚を涙ながらに立出つゝさして行べき方もなけれど此鎌」倉に聊の由縁のありしを心當に尋ねて聞バ其人もいつの程にか世を去りて頼まん方もあら磯の由井が濱辺にさまよひ來つ詮方なさに親と子が其所に覚悟を極めつゝ身を沉んと爲る所を扇が谷家の奥女中繁咲さまといふお方が御代參のお歸りがけ夫と見るより御駕籠の中から吾侍等親子を呼び止め子細を委しく聞れたうゑ情深くも嚊さんと吾侍を舘へ伴ひ行

きお部屋の中に養はれ二月三月送るうち倖なきうゑに倖なきハ又嗚さんに死別れ夫から後ハ何叉も繁咲さまの御世話にて吾倩が十四になる年から下仕」[9] 女中に加えられ武家に奉公するからハ物書道ハ言ふに及ばず釼術柔術の一手二手ハ知らねバならぬと隙ある毎に繁咲さまより教へられ御恩に月日を過るうち御朋輩の妬みにて繁咲さまにハ奥様より御不興を蒙りたまひ夫が病の根となりて今より三稔先の秋終に空しくなり給へバ其悲しさと口惜さに袖ハ涙の乾く間も泣明し又泣暮し日数ハ歴れど忘られぬ歎きの中に今度の催し錦の簇を御戸張とハ他の譏りも恥かしく爰ぞ御恩の報じ所と繁咲さまに心嗣港[ママ]の噂に叉寄せて及ばずながら奥さまをお諫めもふせし甲斐も」なく反て此身に罪を得て御舩の中に押込られしに又はからずもお梅さんの捕手の役をゆるされて恩あるお方の娘御とも知らで勝屓を争ひしハ危ひ叉でござんしたと身の越方を物語れバお梅ハさらなりお安さへ感嘆してぞ已ざりける

第廿囲

芦間の忍術暗に錦簇を奪ふ
漁村の扁舟 暁に三女を送る

當下お安ハ嚮よりの二個が言話をつく〳〵聞て思はず小膝を礥と打ち天晴愛度お両女のお物語を聞に付け稟すも嗚呼なる叉ながら吾倩が實の爺さんハ基鎌倉の商人なれども」[10] 利欲に泥む叉をせず武術を好むのみならす力飽まで強けれバ自と相撲の妙を得て強きを蹇き弱きを助くる俠客にて在しかバ人にも敬ひ立られしに其身の運や拙かりけん四十もいまだ越ざるに一稔疫病を煩ふてさま〳〵医療を尽せしかども終に薬のしるしなく末期の極の枕辺に吾倩を近く呼び寄せて我ハ素より商人なれども利慾の爲に心を寄せ生涯を過さん事最口惜く思ふにより何卒武士の小官ともなり鎗一筋の主にもならんと思ひし事も爲果さで今を最期となりしこと无念といふも餘りあり其方ハいまだ幼少て殊に女子の身」なれども我存念を受繼で成長の後武勇をあらはし身をも家をも興すべし遺言事ハ是のみなれバ必ず忘るな忘るなと言はれし時ハ吾倩ハ五ッ幼少心に悲しくて如何すべきと思ふうち又嗚さんも世を去りて親族とてもあらざれバ此腰越に引移り里人達の情にて成長にしたがひて彼の遺言を須臾も忘れず爭武名を顕はさんと思へど未熟の吾倩ゆゑ身ひとつにして叶ひがたく神の冥助を蒙らんと此所より程も遠からぬ江の嶌の弁才天に夜毎に歩みを運びつゝ祈念に他叉ハなかりしに願満日に及びし夜社檀に思はず」[11] 眠りしに忽地音楽の聲と侶に神女の御姿顕はれ給ひ最清らかなる御聲にて汝美名を世に挙んとするその宿願ハ空しからねといまだ時運の至らねバ今よりこゝろを勵まして汝が過世の因縁ある七ッの星に囲り逢ひ汝と侶に八ッの星全く集る叉を得バ周く四海に名をあげて後の世までも賢女と称れん汝其星を得んと思はゞ日毎に片瀬川にいたり見よかならず二ッの星に逢んと宣ふよと思ひしに忽地夢ハ覚しかバ是かならず霊夢ならんと

猶も神前に祈念して夫より神のおしへに任せ日毎に此川へ船を」浮べ待甲斐ありて今日といふ今日お二個さんに逢ひし叉偏に神の導か吾倩がよろこび此うゑなしと語るを打聞く八代お梅是又竒中の一大竒事と驚嘆してぞ居たりける其ときお梅ハ両婦に對ひ其お話を聞につけ思ひ合する叉ありとて那青柳が身のうゑの事お斉の尼のおしへの事まで一伍一什を譚り尓して見れバ此三個もまた青柳といふ處女も腹こそ異れ過世から互ひに結ばる縁あれバ今より妮妧の義をむすび苦楽を侶にするならバ嘸頼毋しうござんしやうと言はれてお安も八代も侶によろこぶ不思義の」[12] 竒縁爰に三女を會せしむるも弁才天の冥助なるか量り知られぬ叉なりけり恁て三個の長譚に永き日も稍黄昏て塒へ急ぐ群鳥の羽音にお安ハ打おどろき餘り話説に実が入て日の暮るさへ忘れました尓ども這等ハ人里遠く洩聞く人ハあらねどもお両婦さんの御勞をも顧はぬ吾倩の心なさ見苦しくとも今宵一夜ハ吾倩の住居でゆる〳〵と何かの話説をいたしませう倖の此宵闇路次を忍ぶに便りもよしいざ諸侶にと言ひつゝも此方の芦間に舫置たる那網船に乗り移れバ二個も續て」乗りうつる其時お安ハ今まで乗り居し小舩の舳先に手を掛て何の苦もなく俯伏にくつがへらせて押流し是で心の殘りハなひと言ひつゝ完尓と打笑し其力量を感歎して両婦ハ目と目を見合せつゝ最たのもしくぞ思ひける有右てお安ハお梅等両女を舩より丘に登らせつゝその身ハ舩を芦間に繋ぎ投網を肩に打かけて両女に先立案内を為つゝ程遠からぬ我家の方へ足を速めて急ぎ行跡ハ淋しき薄闇に渺々たる河原のありさま最物凄き折こそあれ右方左方の芦間より現れ出たる二個の婦女互ひに」[13] 顔をすかし見て•お理喜さん•お友さんか•そして首尾ハと問ひかけられ此方の婦女は完尓と打笑み其所に誤りハござんせん豫て約束した通り吾倩ハ彼方の芦間から始終の様子を立聞にお梅とやらが錦の籏をたしかに所持せし様子ゆゑ透を窺ひ覗ひ寄り習ひ覚へし忍の術にて豫て准備の小包と御籏の包と摺替て則爰にと言ながら懐よりして件の籏を取り出しつゝ四辺を見まはし首尾よく奪ひ取りたれどもお梅とやらが心付き今にも尋て來んも知れずお前ハ御籏を携へて些とも速く此子細を」【挿絵第二図】」[14] お道さまへ禀あげ御籏をお渡しもふしなバ能お差圖の有ハ必定吾倩ハ爰等に忍び居て今一手段ござんすと言つゝ御籏をわたすにぞ那方の婦女ハ受取てそんなら吾倩ハ例の塲所へ•ア、合点でこさんすと互ひに咀き頷きつゝ道を遠て芦原を何所ともなく走せ去りける

作者云　早竒是なる両個の女ハ善か悪か开も甚麽後田に解分るを読得て委しきを知り給へ

却説勇婦お安ハ両婦を我家へ伴ひつゝ圍爐裏の埋火掘出し先行燈に灯を照〔ら〕し両婦を其所に安措せその」[15] 身も倶に圓居して最前からの御話説でハお労れのみかお腹さへ嘸お空食ござんしやう何がな御膳のお菜をと思へど何をもふすにも斯る卑賤世渡りゆゑ思ふのみにて夫さへならずお口に合ぬハ知りながらも初見參を祝くしるし

【挿絵第二図】妮妙不思義に錦の籏を奪ふ

片瀬川にて手猟の雑魚是なと焼てお夜食をと言ふを両女ハおしとゞめ辭ふを聞ず立あがり圍爐裏に柴を折焚つゝ手づから夜食を安排して最念頃に勧むるにぞ二個も今ハ辭ひかねて其赤心を悦びつゝ賓も主も諸侶に稍夕餞も果しかバ又もや互ひに身のうゑを説つ説れつ」閑談に斯須時刻のうつる程にお梅ハ嚮に取りかへせし御籏の包みを取出し此一品の手に入るからハ吾侪ハ一旦古郷へ帰り豊嶋のお家へさしあげて親の恥辱を清いだうゑ過世の縁ある皆さんに復再會を遂ませうと言つゝ包みを打開けバ錦の籏にハあらずして中にハ綾の女の片袖是ハとばかり打駭くお梅ハさらなり八代もお安も倶に仰天して互ひに目と目と見合すのみ呆れてしばし忙然たり其ときお安ハお梅に對ひ何ハ兎もあれ大切な御籏を人手に渡してハお前の功も無になる道理其盗人ハ」[16] 知らねどもいまだ時刻も遅れねバ尋ねて知れぬ亙ハあるまい今から直にお梅さん八代さんも諸倶にと言はれて八代一議に及ばずなるほどお前の被仰とふり一時なりとも猶豫ハされぬ先さし當つて氣掛りハ片瀬川なる芦間の小舩那処を一旦尋ねたうゑと言ひつゝ二個ハ立上るをお梅ハ急におしとゞめお二個さんのおこゝろざしハ身に余る程嬉しひなれど吾侪が側を少しも放さず大切に守護する御籏を摺替て取るほどの奴放心さ〳〵這辺に居ませうかよし又此地に居るにもせよ此所ハ鎌倉へ遠からねバ扇が谷の捕手の」人数忍び居らんも量られず尓するときハ盗まれし御籏を取り得ぬのみならで反て吾侪等三口に不思義の難義あらんも知れずよし夫

とても吾倩ハ覚期恐るゝ夏ハなけれどもお二個さんをもまきぞへせられ志願をも立通さで命を落さバ世の人の物笑ひともなりませう夫のみならで八代さんハ仮染ながら扇が谷の禄を契たるお身なれバ今こそ吾倩と義を結び苦楽を倶にするとても御簾を倶に尋てハ吾倩に對して信ありとも扇が谷こそ不仁なれ大恩うけたと被仰た繁咲さまへ義が立まい兎ても角ても奪」[17] はれ〔し〕ハ吾倩が不覚是非もなしお両個さんの心ハ知らねど一旦多塚へ赴きて那青柳さんにも様子を語り再び御簾を取戻す手段を其所に定めませうと義理を説たる才女が言葉に両個ハ深く感服して終に其意に随ひける其中に八代ハ欣然として形容をあらため既に先にも禀せし通り七ッの歳に死別れた親の石碑ハありながら香花さへも備へずに此年月を過せしに今時ありて斯までに世に類ひなき賢女に因みを結びて古郷の親の牌前に手向る水ハ千部の經にも弥増て草葉の蔭より双親がさぞ悦ぶで」ござんせうと恁る時にも親を忘れぬ其孝心を感じつゝ猶も余談に及ふほどに春の夜なれバはかなくも暁の鐘告渡り鶏鳴東隣に聞ゆるにぞお安ハ駭き外に出て空の様子を打ながめまだ東雲にハ間もあれバ少しも路次の小暗きうち芦間の小舩に打乗て夜明ぬ先に藤沢まで皆さんお仕度なさんせと言はれて頷く八代お梅身繕ひするその間にお安ハ家内を取片付け一風呂敷に引包みて卒諸倶にと言ひつゝも三個ひとしく背戸口より舩場をさして急ぎける

貞操婦女八賢誌三輯巻之一 終」[18]

貞操婦女八賢誌三輯巻之二

東都　教訓亭主人編次

第廿一回

戸田の河原に苦七袖乞を誘ふ
夛塚の知縣に二賢義婦を救ふ

前話不題武藏の國夛塚村の知縣戸塚大六ハ姪行非道の曲者なれバ過し日青柳を搦め捕りてより梅太郎等が詮義ハせで朝暮青柳を居間に侍らせ酒興に夏よせ種々と艶行ことを言ひかくる其躰曽て公ならねバ腹立しくも口惜しくて或ひハ罵り恥かしめ兼諾氣色ハなきものから」大六ハ猶懲ずまにおどしつすかしつ欺計て其情慾をはたさんと思へど義氣ある青柳の爭か不正に従ふべき恁て數日を經るほどに大六も今ハ堪へかねて青柳をきびしく縛め一間の中へ押込て更に三度の食事さへ思ふほどにハあたへもせず以前に替りし振まひハ是みな大六が姦計にて尓して苦め置ときハ其堪がたさに自ら心にしたがふことも有んと斯ハはからひたりしとなん偖もまた神宮屋にてハ素より異血處女なれどもお袖が容貌の美麗によりこれをおとりに大家へ取入金の蔓にありつかんと夫婦密かに相談」[1] して其内心でありけるに此ほどお袖ハはからずもお張に欺き誘引れ家出なせしを一筋に梅太郎が連出したりと思へバ无念さ限りなくいかにもして取戻さんと思ふ折しも様子を聞バその夜戸塚大六が杢兵衛の家におし寄せて家財を殘らず闕所なし食客青柳を搦捕しと其噂もつぱ

らなれバ夫婦ハ是を聞よりも聊心地よく思へども梅太郎ハ亡命なしお竹も終に身を遁れて両個ともに行衛知れねバ意恨ハ猶も晴がたく敏青柳を拷問させ梅太郎が在家を尋ね怨みを報はんと思ふにぞ」那大六に金子を贈り頻りに吟味を急げども大六ハ只青柳が艶色に心まよひいかにもして手に入れんと思へバ是等の叉に懸念せず空しく月日を過るほどに神宮屋夫婦ハ意恨に堪ず金に爲さんと思ひし處女を誘ひ出されしのみならず五十両の金までも盗み去られし叉なれバ此まゝにてハ濟されず兎ても角ても大六が心に叶ふやうにもてなし那青柳を拷問なさねバ怨みを報ふ日ハあらじと種々思按を囲らせしに其頃戸田の川縁に両個の女乞食ありて其さま妮妙のごとくなるが髪餝衣粧ハやつれたれ」[2]ども容貌のうるはしき事鄙にハなか〳〵有がたしと噂する者のありけれバ神宮屋夫婦ハ是を聞より一ッの謀計をもふけしかバ早速家の老僕なりける苦七といへるに所存を明し夥数の錢を齎して戸田の川縁に赴かせつゝ件の乞食に夫をあたへて密にたのみたき事あれバ今宵神宮屋まで參るべし叉なるうゑハ褒美の金ハ両人が望みに任せんとひそやかに言聞せけれバ二個の乞食ハ思はずも多くの錢を貰ひしのみか此夛塚にて分限者と名に聞へたる神宮屋より斯念頃に呼るゝ叉ゆゑ何か」子細ハ知らねども褒美と聞て打欣びいかにも今宵參るべしと両女が荅に苦七もよろこび猶左右と約をなして急ぎ神宮屋へ立帰り主に首尾よきを語りつゝ其日の暮るを待ほどにはや晩鐘もいつか過て夜も初更にぞ及びける其とき神宮屋の裏口へ忍び寄り來る以前の乞食苦七ハ夫と見るよりも豫て手繰を定めし事ゆゑ庭づたひに案内をなし夫婦が居間に伴ひ行て密に斯と報知けれバ主夫婦ハ端近ふ椽先に立出つゝ両女が容貌をつく〳〵見るに實聞たるに弥増せし風俗」[3]のみか立居振舞賤しき者と思はれねバ主ハ深く欣びつゝ那袖乞をさし招き汝等両婦を呼び寄せしハ深き子細のある叉ながら何に寄らず我言ふこと頼まれてハ呉まじきかと言はれて両女ハ臆する色なく吾倭等如き賤しき者を人らしくも呼び寄られ斯念頃に宣ふものを假令いかなる叉にもせよ身に叶ひさへする叉なら仰せハ背きもふすまじと言ふに主ハます〳〵欣び先彼両個に浴させ新に衣類をあたへつゝ一間の中に件ひ行き酒食を出して饗應たるうゑ四辺の人を遠ざけて主ハ言話を密」つゝ憑みといふも他ならぬど箇様〳〵の叉により一個の處女お袖をバ梅太郎が爲に連出されしにその夜また如此〳〵の叉ありて梅太郎が家を闕所せられ食客青柳といへる處女ハ其場にて召捕られしかど那梅太郎が在家ハ素より妹お竹も遁去りて終に行衛の知れざれバ我怨みハ猶晴がたく尓とて他に手段もあらねバ當所の知縣大六どのに金銀夥数を賄賂して那青柳を拷問させ梅太郎等が在家をバ白状させて搦捕此欝憤を散ぜんと思ひしかども如何にせん大六どのハ」[4]青柳が只艶色にのみ迷はれて吟味の沙汰も有ざれバ斯ていつまで在たりとも意恨の晴るゝ日ハあらじと思ひしゆゑに種々と日夜心を苦しめしにはからず汝等両女

【挿絵第三図】
苦七戸田河原に乞食を説く

を得てひとつの竒計をもふけしなり其子細ハ別義ならず汝等を彼所に連行此者ハ鎌倉なる由縁の人の處女なるが薄命にて親に死別我等が方にたより來て何れにも佳方へ奉公為たしと望むゆゑ不都束者にハ侍れども若思し召もあらんにハお側の塵をも拂はせ給へと言話を工みに勧めなバ素より好色の大六殿ゆゑかならず両女を抱へ」【挿絵第三図】」[5]」らるべし其とき汝等心を合せ大六殿を甘言欺計折よくハ青柳を拷問さする様に爲べし若夫とても心迷ひて拷問すべき氣色なくバ折を窺ひ青柳を入置一間に忍び入り密に彼嬢を盗み出し我方へ送るべし尓する時ハ此方にてきびしく彼嬢奴を貴問ひて一々白状させたるうゑ憎しと思ふ梅太郎お竹も倶に搦め捕り今の怨みを晴すべし然ハ言へ是等の秘叉を大六殿に推量てハ労して功なきのみならで我身のうゑにもかゝる叉ゆゑ假令青柳を盗み出すとも誰が所爲とも知れざるやう必ず心を用ゆべし其時にハ」[6]我方にも豫て手繰を定め置き首尾よく那嬢を奪ひ去なん憑みといふハ此事なりと言はれて二個の袖乞ひハ思はず莞尓と打笑て如何なる叉かと思ひしに青柳とかいふ娘公を拷問さするか連出すか二ッに一ッの今のお頼み箇様に禀さバ何とやらん嗚呼なる者と笑はれんが吾倘等両個も腹からの袖乞にてハ候はず親ハ京家に仕官して由所ある者にて侍りしが讒者の舌にかけられて終に浪人の身となりゆき夫れより諸國にさまよふうち双親をさへ死去て寄方なければ是非なくも斯る賤しき業もしつ僅に命を」つなげども悲しさ難面さ堪がたく人に情のあ

るならバ如何なる方にも身を寄せて爭此苦を遁れんと思ひし甲斐にはからずも今宵此家へ招かれしハ吾倆等二個が身の僥倖命に替ても力を尽し首尾よく爲遂し其うゑでハ何卒二女が身の落付偏にお願ひもふしたしといふに主ハ打点頭思ふに増たる両女が種性いかにも頼みし大役を爲たるうゑハ望みの隨意よきにはからひ得さすべしと言ひつゝ妻にも其意を得させ新たに衣装を調へて両個を美々しく粧はせ次の日自ら大六が邸へ両女を伴ひゆき豫て」[7] 約束せし如く如此さゝのよし言ひこしらへて両婦を目見に出せしに按に遂はず大六ハ美色をよろこぶ姪行者ゆゑ忽地両婦を召抱ゆる旨返荅に及びしかバ爲すましたりと神宮屋ハ心中密かに歓びつゝそこ〳〵にして立去りける有右しほどに大六ハはからずも佳人を得てはや塊も身に添はず心頻りに放氣にぞ其夜俄に酒席をもふけ件の両個に酌を取らせて既に数献に及びしに彼處女等ハ肚裏に思ひ設けし妻やありけん言話をたくみ興を添へて猶も數盃を吃するにぞ謀計とハ大六が鈍くも」思ひ知らざれバいよ〳〵大吃ます〳〵醉て終に席にも堪がたくや其侭其所に打臥て果ハ鼾となりにける當剋ハ夜も稍更て子の時ばかりになりしかバ家内ハ都て寐しづみて大六が辺りにハ只那両個の處女のみ他に扈従ふ者もなけれバ両個の處女ハ大六が辺りへ卒度忍び寄り寐息を須臾考へて顔見合せつゝ完尓と打笑みまんまと首尾よくお安さんお前の智恵で易々と此家へ入込む而已ならず此邪智深き大六奴を●お前と両個の口先にて欺して醉せたうゑからハ這奴ハ寂早死人も同前此間に速く」[8] 八代さん●なるほど彼是手間どつて目を覚させてハ面倒ものそんなら直に青柳さんを一間の中より救ひ出し豫て手繰を爲た通り那片村の一家へ●伴ひゆきてお梅さんに何かの様子を咄したうゑ落付先ハ後の事とハ言へ知らぬ此家の勝手若右往左往と迷歩て咎められてハ一大事と言を八代おしとゞめ。其事ならバ氣遣ひなし霄に吾倆が侍婢を歎して聞て置ましたが慥に奥の小院とか這所から直に庭づたひにサアござんせと立あがる最も賢き八代が才智に驚くお安さへ侶に下立庭面の其月代が八代ハ先に」立つゝ小院をこゝろざしてぞ忍びける

第廿二回

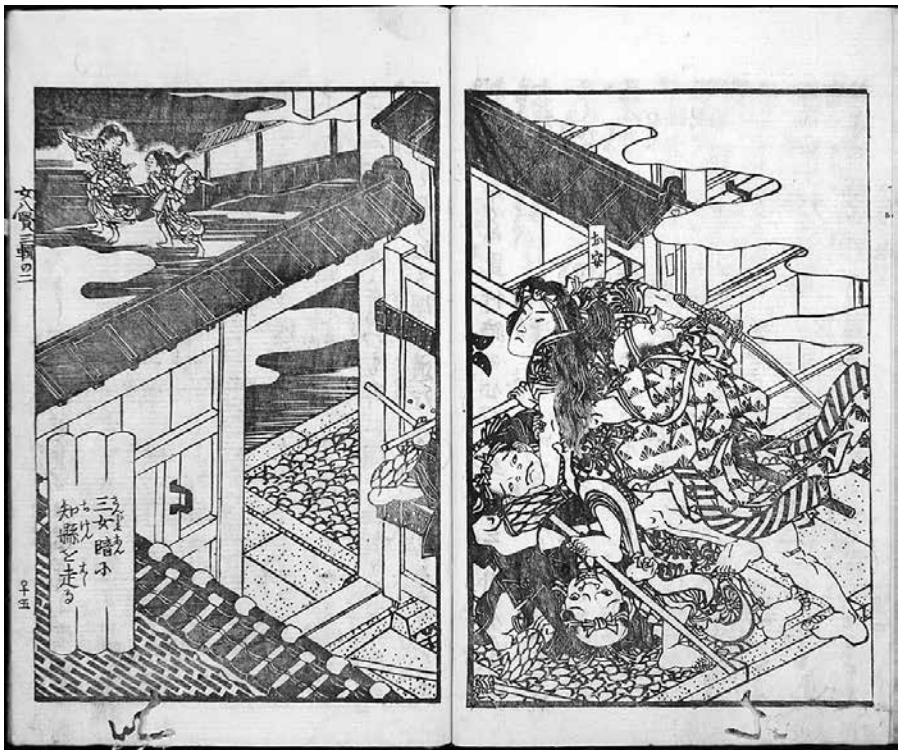
三女暗夜に走て群舘を騒す
奸夫奸夫を計て反身を亡す

却説青柳ハ斯るべしとハ神ならで知るよし絶てあらざれバ明暮難面大六が仕方も邪姪の叶はぬ仇と思へバいとゞ腹立しく尓れども遁るゝ道のなけれバ若此まゝに賊手にかゝり命を捨なバ是までに思ひ立たる宿願も亦梅太郎と義を結びし言話も空しき露と消死しての後まで本意なからん然ハいへ放心さゝ如右てあらバ終にハ命を失なふべし」[9] 尓らんにハ賊手にかゝり耻に耻を重ねんより自ら死ぬるが増ならん勇者ハ死を見ておそれずとか女子に似氣なき妻ながら死すべき時に死せざれバ死にも増たる耻とやらヲ、夫がよい〳〵と心の中にハ思へども身ハ縛の蔦かづら我身で我身の

自由ならねバ死ぬも死なれぬ因果さを慰むる人もあらし吹夜寒の衣身を冷し枕さへせで欝々と物思はしき折こそあれ誰かハ知らず入口なる銅戸を卒度押明て忍び入り來る二個の處女這方ハ不審の晴ざれバ聲をかけんとする口をおさへて手速く青柳が」縲絏を伐り解き耳に口寄せ咡くを青柳ハ聞よりも或ひハ呆れ且欣びそんなら両個のお女中さんもやつぱり過世の縁ありてお梅さんと因みを結び此多塚へお出のところ神宮の家の大變と私の難義をお聞ゆゑ姿をやつし入込んで酒食にふける大六ゆゑ計りおふせて易々と手繰逡へず吾倩をバ救ひ出して下さんしたかシテお両個のお身分ハと問ひかけられて八代が那吾倩等ハ鎌倉でと言んとするをお安がおし禁其お話説ハ跡でもなる事爰にあんまり間どつて若大六か尓もなくとも家内の者が目を覚さバ是まで折角」[10] 爲おふせた手繰も水の泡となり反つて難義にならうも知れぬ八代さんハ此間に速く青柳さんを伴ふて爰かまはずと裏門から那村尾の草屋へと言はれて八代打頷きそりや合点でござんすがお前ひとりを殘してハと言ふをお安ハおしとゞめナニ氣遣ひハござんせん吾倩が爰へ殘るのも若大六が目を覚し追手をかける時の爲ゆゑそんな叉にハ懸念なく倖ひ雲に入る月の小暗きうちに卒敏くと急立られて八代も又青柳も辭ひかねつゝ手速く小褄取上て密に立出る裏門口小ぐらき方に身を寄せて潜戸卒度」推明つゝ既に出んとする折しも此物音に駭き覚けん庖所の大戸押明て僻者待と言ひつゝも用心棒を打振〳〵現れ出たる両個の小僕青柳と八代を敵仆さんと彼是めくを跡より徐々忍び來るお安ハ夫と見るよりも飛鳥のごとく駈寄つて二個の男の襟がみを抓んで此方へ引戻し•爰かまはずと些ともはやく•そんなら跡を憑むぞへ•アイ合点でござんすと言ふを後ろに聞捨て両個ハ先へ走り行く其時二個の小僕等ハお安が腕を振りはなち猶懲ずまに打かゝるを右と左へ引外しット身を寄せて突出す掌の當身に二」[11] 個の男ハ須臾も得堪ず仰向にウント言ひつゝ仆るゝを見向もやらず裾はせおり青柳等に追ひつかんと足元見へぬ薄闇に千草百草蹈分て頻りに路次を急ぎつゝ二町三町來し折しも片辺に茂りし笹原よりあらはれ出たる一個の癖者頭巾目深に冠りしかバ男か女か知らねどもお安の姿を透し見て打点頭つゝ亦以前の小笹の中にぞ隠れける　作者いはく此曲者のわけ廿七回に出す　却説また大六が郡舘にてハ嚮にお安になやまされし二個の小僕ハ稍須臾倶に氣絶や爲たりけん起もあがらで居たりしが既に半晌ばかりにしてやうやく」蘇生しかバ打駭きつゝ四辺を見るに那お安等ハ何地へ往けん更に影だも見へざれバ互ひに目と目を見合すのみ又詮術もなきものから然ハとて止むべきにあらざれバ急ぎ大六が居間にいたり叉如此〳〵と報知にぞ其時までも大六ハ猶熟睡して居たりしが今此知らせを聞よりも俄然として起直り且駭き且怒りて偖ハ女子と氣をゆるさせ大切なる罪人を奪ひ去られし口惜しさよ是みな神宮屋平左衛門が深くも謀りし叉ならめ尓もあらバあれ此報ひ今にぞ思ひ知らせんとて忽地人數を准備しつ

大六自ら先に找みて夥兵等に」[12] 下知して言ふやう汝等手緩き働して捕逃さんもはかられねバ各々刃を抜連て家内の奴等残りなく皆悉く砕尽して彼青柳等三個を再び首尾よく取かへすべし心得たるかと言ひつゝも躾て件の神宮屋なる表口より裏口より三七二十一に砕入るにぞ思ひがけなき支なれバ麕と庖所に熟睡せし雑人小僕ハ周章騒ぎて喃盗奴よ泥坊よと叫ぶを這方の夥兵等ハ躍りかゝつて砕りまはる這方ハ多勢那方ハまた不意をうたれしのみならず雑人どもの甲斐なさハひとりとして敵對者なく我先にと」逃廻るにぞ那夥兵等ハいよ〳〵勇みて或ひハ袈裟掛腰車またハ肩先臑掌其さま瓜を切るごとく瞬間に十四五名枕を並べて死したりける尓れども戸塚大六ハ神宮屋夫婦に出合ず況て青柳等三女の何れに隠れ居るを知らねバ猶も夥兵を励まして奥と納戸を心ざし會釈もなくぞ砕入ぬ案下神宮屋平左衛門ハ有右べしとハ露知らで嚮に二個の袖乞に竒計を示して郡舘へ奉公させし支なれバ近きに青柳を拷問するか尓なくバ密に連出すならめ然るときハ左やせまじ右やせまじと姦計に夫婦額を集めつゝ閑談数」[13] 剋に及ぶほどに更行鐘に心つき夫婦互に臥房に入しが忽地家内騒々しく小僕の呼り叫ぶ聲耳に響きてすさましく何支やらんと起上り準備の手鎗を引提つゝ身構なして居る所へ間隔の襖蹴はなして先へ找みし戸塚大六夥兵を後方に従へつゝ聲高やかに喚はるやう汝姦賊いかなれバ我恩沢を蒙りて数年當所に家居を構へ商賣に利を貪りながら其恩報ハ思ひもせで素性知れざる婦女をかたらひ我を計りて熟々と重き罪ある青柳を奪ひ去らせし汝こそ賊婦に増たる罪なりかし頓三女の賊婦をわたし」**【挿絵第四図】**」[14] 我縛めを受なバよし不の字を言はゞ汝等をも小僕に等しく砕尽して後に賊婦の在家を尋ねん尓でも白状せざるかと言はれて駭く平左衛門お踏も倶に仰天して偖ハ二個の袖乞のまんまと青柳を連出したるに追手の人数に迫られて我方へハ來る事叶はず他方へ走りしものなるか然にても連出すならバ豫て手繰をなさんと言ひしに女子の淺き心から愁なる支爲出して毛を吹て此大疵を求めたる物ならんと流石姦智の平左衛門も那二個の袖乞をお安八代の二賢女と悟らぬも現に道理なり恁てまた平左衛門ハ支の」[15] 破れと思ひしかども遁るゝたけハ弁舌にて言ひ遁れんと思按しつ妻にも急度瞬目して大六に打對ひ思ひ寄らざる御難題小拙支ハ梅太郎に處女を奪ひ去られしゆゑ其遺恨やる方なく爭で青柳を拷問なし梅が行衛を尋ね求めて今の恨みを報はんと思ひこそすれゆゑもなく仇に組せし青柳を救ひ出すべき所謂なし是にて賢察あるべしと言はせもあへず大六ハ忿然として眼を睜り汝何程言語を工み我を惑はさんと欲するとも汝が方より口入せし両個の賊婦が青柳を奪ひ去りしが慥な證据斯ても遁るゝ道ありや」汝がごとき白徒者を白状させんと間どるうち大事の賊婦を捕逃さバ千度悔ゆとも詮なからん夥卒這奴等夫婦を殺して先我怨みを晴させよと言はれて駭く神宮屋夫婦猶言ひ鮮んとする折しも頭の令に従

【挿絵第四図】



三女暗に知縣を走る

ふ夥兵等各々得物を打振〻〻夫婦を中に捕稠んで討てとるべき勢ひに平左衛門も今ハしも奸口利弁を用ゆる間なく妻のお踏を後ろに囲ひ手鎗をもつて防ぎ戰ふ勢ひ剛にハ見ゆるものから素より武道を知るにあらねバ多くの夥兵に砍立られ薄痍四五ヶ所屓ひしかバ防ぎがたくや思ひけん引外して」[16] 逃出すを大六透さず飛びかゝつて肩先より乳の下まで後袈裟にぞ砍下げたり此有様に駭き怖れしお踏ハ心も身に添はず尓ども猶豫する場所にあらねバ爰ぞ一生懸命と捕手の中を潜り抜け逃んとすれども女子の甲斐なさ終に右より左より眉間肩先嫌ひなく盲手砍に砍なされ其所に命を落せしかバ大六ハ心地よげに夫婦が死骸を見やりつゝ猶も夥兵を勵まして家内を殘らず尋ぬれども那三個の處女ハさらなり婢女等も惣て逃たりけん人影さへも見へざれバ大六ハ憤」怒のみ終に望みを失ふて又詮術もなき侭につく〳〵思ひ回らせバ我一朝の忿りに任せ神宮屋夫婦を殺せしかども賊婦の行衛知れざれバ其尾を砍て頭を放すの理に似て今更に猶欝憤ハ晴がたし兎ても角ても此侭にて賊婦を取も戻さずバ我一分の立ざるのみか他の批判も免れず尓らバ今より手分を為して近郷近在隣國まで尋ね求めて搦捕今の思ひを散ぜんと俄に手繰をなす折しも忽地大六が郡舘の方に猛火盛んに燃あがり天をも集す勢ひなれバ大六再び打駭き邸の方に失火有ぞ」[17] 夥卒急げと言ひつゝも慾に目のなき大六なれバ一品にもせよ我品を焼てハ損のうまる瀬なしと處女が詮義も打捨て息をもつかず走せ去りける

實や天道ハ善に与し悪を懲すと那青柳が義心なる一囲悪手に囚はるれども又はからざる助あり神宮屋夫婦が奸悪なる始ハ巨萬の黄金を積とも早に非命の死を遁れず只大六が非道のみ天爭か是をゆるさん开ハ末の巻に鮮分を見て知らん

貞操婦女八賢誌三輯巻之二終」〔白〕[18]

貞操婦女八賢誌三輯巻之〔三〕六〔ママ〕

江戸　教訓亭主人編次

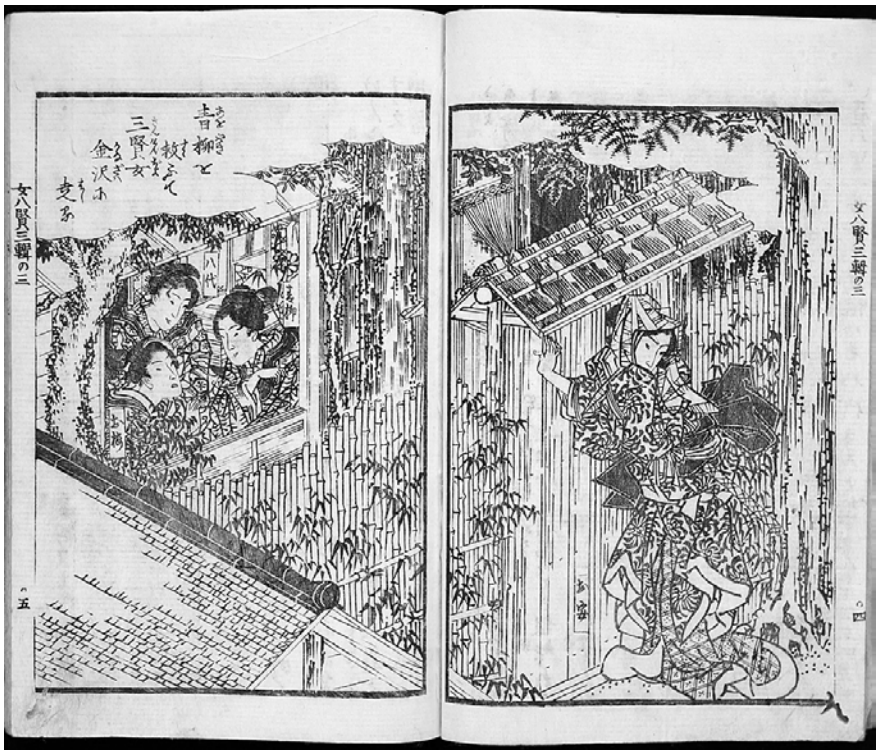
第廿三回　樹間の草屋會四賢女　老婦の赤心餞別一簡

再説青柳八代ハ於安に跡を振り任せて大六が舘を立出つゝ足をはやめて往ほどに稍村はづれに來し折しもひと叢茂りし木立の隙より立あらはれし一人の處女先にすゝみし八代と顔見合せつ小聲にてむすめ〳〵八代さんか〳〵お梅さんか〳〵梅シテ大六の舘の都合ハ〳〵首尾ハ寔に上々吉即ち爰へ青柳さんをト言」とき跡より青柳が〳〵お梅さんでござんすか扨も〳〵トばかりにて互ひに涙さしぐむハ流石婦女の情ならんか霎時あつて青柳ハ二個に對ひて容をあらため〳〵那大六が邪曲より无失の罪に囚はれて迚も逅れぬ命とハ心で覚悟を為ましたなれど因を結び義をかためたお梅さんに寂う一度會て言たい事もあり聞たいこともあるものを這侭死ぬとハ口惜しひと思ふた念の届いてか今夜はからず皆さんの救佐に萬死を逅れたハ浮木にあいし盲亀よりもまだも得がたい僥倖と思へバ命をなげうつて御恩報じハいたします夫につけても不思義なハお梅さんハ過し頃御簾を尋て」[1]

豊嶋家へ亡父の汚名をあがなはんと首途ありし其日よりいまだ幾程も立ざるに古郷へお帰りありしのみかお二個さんを伴ふて私の必死を救はれしハどふも心に鮮せませぬ御簾ハお手に入りましたか亦ハいらぬか気がゝりな早ふ聞せて下さんせト問はれてお梅ハうち点頭〳〵梅其疑ひハお道理ながら是にハ種々子細のあること併爰等ハ往來ゆへ長話語もおかしなもの狹くハあれど那なる小家へ〳〵そんなら其所で何かの話語を〳〵言つたり聞たりいたしませう〳〵梅サアござんせト　八代於梅先に立また後につき林の中に入るほどに五十歩ばかりにしてあやしげなる白屋にぞいたりける其時お梅ハ先へすゝみて門の戸卒度引あくれバ」内にひとりの老人ありて最まめ〳〵しく応荅にぞ青柳も八代もつゞいて一間へすゝみ入る却説老女ハ火桶を運びぬる茶をすゝめなどするはしにお梅ハ青柳に對ひていふやう〳〵梅最前お前がお尋ねの私等が身の上ハ話語バながい事ながら其故ハ箇様〳〵ト　彼鎌倉にて花の方が錦の簾を御戸帳にして諸人に參拝をゆるすよしを聞つたへて小舩に乗り舩樓に紛れ登りて御簾を取かへさんとせしはじめより八代と組撃して滾びて小舩に落し事其後片瀬川へ流れ來てはからずお安にたすけられ迭に身の上を明せしに八代ハ云々なりお安が身もとハ箇様と彼神夢の事繁咲が

夏すべて尼公に宿因あるその」[2] 槩略を説示し夫につけても无念なハ折角手に入る錦の御簇いつの程にか摺替られ似ても似つかぬ此小づゝみと言ひつゝ腰に付たりし帛包を取り出し中にハ綾の片袖が入れてあるゆゑ若萬一鑿義の手蔓にならうかと思へバ今に捨もせず携てハ居るものゝ今まで苦中の苦を堪び命にかけて取かへせし御簇を鈍くも摺替られ言甲斐なしと人さんに思はるゝさへ面なきに青柳さんハ取わけて松井田宿よりはる〴〵と世に亡親の遺言まで傳へしものをと口惜しくも腹立しくもござんせう尓ハ言へ今さら百千度悔とも詮なき吾倩の不幸只此上ハ」皆さんの思し召こそ願はしと始終を聞て青柳ハ慰めかねつ稍須臾溜息ついて居たりしが思ひかへしてお梅に對ひ大叉の御簇をうしなひしハ最も本意なき事ながら過世の縁ある御両女に邂逅しも不思義の倖ひ今より四個が心を合せ隈なく尋ね求めなバ取かへす日も遠からし夫より先に問ひたきハお前の養家の騒動と吾倩が知縣へ捕はれしをどふして知つてござんしたと言はれて八代小膝を找め其疑ひハ尓る事ながら日外腰越を立会りてより心急くまゝ路次をいそぎて其次の日の黄昏に此夛塚に近寄折しも俄に降出すむら雨を霎時さけんと」[3] 立寄りし木影に計らず出會し老女お梅さんとハ知己にて這囲養家の騒動とお前の難義の一伍一什箇様〻と報知られて駭く中にもお梅さんハお前ハ素よりお竹さんまたお袖さんの叉さへも按じハ嘸とおもへども他に思按もなかりしにと言ふをお梅ハ語をついて其折會た老女といふハお前もかね〴〵噂に聞く長堤の孫三が実の妮夫ゆゑ吾們三女を最念頃に慰めて此家へ密かに伴はれお前を救ふ相談にさま〴〵心を労せしかども吾倩ハ以前と姿ハ異れど知縣の鑿義嚴しけれバ昼ハ里へも出る叉愜はず八代さんとお安さんのみ終日四方を」【挿絵第五図】[4]」走囲りて縡の様子を窺ひしに心に浮む叉ありとて一ッの竒計を新作意その次の日よりお両女ハ仮に袖乞と身をやつせしに終に謀計其圖に當り今宵の本意を遂られしこと皆お両女の方寸よりたくみ出せる所なりと聞いてよろこぶ青柳ハ厚き情を感じける斯須あつて青柳ハ嚮にお梅が取出せし帛包を打ひらき中なる綾の片袖を左視右視つゝ訝かし氣に稍うち按じて居たりしが心に思ふよしやありけん完尓と笑つゝ打点頭慥におぼへの此片袖是と御簇と摺替たらバ其盗人も大かたハ心當りがござんすといはれてお梅も」[5] 八代も膝のすゝむを覚へぬまでに青柳の顔うち守りて〈梅〉何か様子ハ知らなひが此片袖が手がゝりとハ奈何なる子細ぞ教へてト問はれて此方も膝おしすゝめ〈青〉サァそのわけハ長い事過頃七月の中の五日お前が首途ありしより四五日を經るほどにお袖さんハなほさらにお前の事のみ思ひくらして終にお張にたばかられおなじ月の末の五日に湯が嶋の祭礼を見物に事よせて箇様〻の縡ありしそのとき私も湯立を見んとて湯が嶋にいたりしにはや縡すみし跡なれバ本意なく思ふ戻り道丸塚山へ來しときハ日ハ入り」はてゝ宵月の木の間をもりて照り渡る折しも向ふにあやしき人影様子奈何にと窺ふ

【挿絵第五図】



青柳を救ふて三賢女金沢に走る

に云々の事ありしを彼お張がお袖をとらへ手ごめにしたる條より仙女真弓がお張を殺しお袖と名乗りあいし事且お袖ハ真弓が實の妹なりし支その父の事母の事お袖が節義真弓が至孝また真弓ハ錦の御簇をもて父の仇なる扇が谷を狙ひ撃んと思ふによりお袖が望みに応ぜざりし事其時青柳ハ錦の御簇とり復さんとて真弓と挑み戦ひし折あやまつてお袖を深谷へ落せし事夫より猶もあらそひしに真弓ハ不思義の術あつて」[6] 小笹の中へ飛入りしまゝ影を隠してついに見へず其所に望をうしなひしかバ獨り冡塚へ戻る道にて鍬八に行會ひつゝ神宮の騒動を聞しゆゑまた如此さにはからひてお竹を鍬八に委置き其身ハ冡塚の家にいたらんとせしに大六のために捕はれしその支の終りまで一伍一什を物語り〳〵其以前丸塚山にて神女真弓と挑みしときたしかに見出た綾の小袖に寸分遠はぬ此片袖そうして見れバ那御簇ハふたゝび真弓がうばひしか夫れとてもはかられず ト聞てお梅も八代も側聽せし老女さへその英才と明弁を歎賞するのみ又さらに思ひ兼」てゞ居たりけるそが中に八代ハ心にうかみし事やありけん思はず小膝をはたと打〳〵青柳さんのお話語で思ひあはせる事がござんすその子細ともふしますハ私がいまだ合が谷の奥につとめて居る時分十六七の一人の娘その名もたしかお道とやら錦の簇を奥さまへ進るを功にお側つとめを願ひのとふり免許されしに基より理發の娘ゆゑ奥さまのお氣に入りて夫から思し召つかれた那御戸帳の舩樓そふして見るとお道とやらハまことハ仙女真弓にて

御籏をおとりに合が谷へ近寄る手段でござんせうト迭に意中を語り合ひ稍時うつる折こそあれ」[7] 外面の方より聲高く〳〵這所ハ孑塚の里ちかきに郡館への聞へもおそれず忍び咄しハ膽太しト言はれてみな〳〵うち驚く折しも門の戸おし明て這方へ入來る婦女あり是則お安なり其時お安ハ人々にうち對ひつゝ完尓と笑ひ〳〵私が今の大聲を嘸腹立しう思はんせうが爰であんまりなが話説して萬一追人のかゝつた時ハ後悔先に立ずとやら夫ハ言はずと皆さんが敏心得てハござんせうなれども智者にも一失とか其所を思ふて那様に驚かしたも隔ぬ心かならず悪しう思はんすなト言れて皆婦心落着てお安が頓才に感じつゝ果ハ笑ひを催しける」其中に青柳ハお安に對ひて容を正し〳〵最前ハ事繁くて再生のお禮をバろく〳〵禀す隙もなく其侭にして過ました今宵の御恩ハ生を變ても忘却ハいたしませんトいふをお安ハ聞あへず〳〵互ひに宿因あるものを救ふのも救はれるも頼母づくでござんすものを恩の義理のが入るものでト清きお安が言の葉に青柳ハなほ感佩して楽しき事に思ひつゝしばらくして又言ふやう〳〵過剋私と八代さんが郡館を立出るとき跡をお前に振り任せ其侭爰へまゐつた跡にて何も故障ハござんせぬか心がゝりでござんしたト言へバお梅も八代も奈何〻〻と尋ぬる」[8] にぞお安ハ聞つゝうち点頭〳〵那時跡へ引殘り二個をその塲で打倒せし後ハ拄へる者もなけれバお前方におくれまじと道を急ひで此家の門へ來つゝ様子を窺へバ皆さんのお話語最中夫ゆゑ態と這入らぬハお話語の腰を折んも心なく又ふたつにハ追手の者がもし來らんもはかられねバその要心をも思ふゆゑ外から委細のお話語を今まで聞て居りましたト言れて皆々感歎しつゝ最頼母しくぞ思ひける

作者いはくお安かこの家へ來る道にて笹原より曲もの出てお安が姿をうか、ひ見しこと既に二の巻の末に出たりされども お安ハそれを知らねバ今こゝにいはず後に至りて詳かならん

却説また此家の老婦ハ衆婦の明論義談を聞毎度且驚き且感じつゝ歎賞」するのみいまだ一句も出さゞりしが此時漸々後方より膝をすゝめて四女に對ひ〳〵貴婦がたのお話説へ私が口を出しますハ片腹痛うござゐませうが私の在所ハ鎌倉に程遠からぬ金澤の瀬戸ともふす片田舎にかすかに消光て居りましたが夫にハはやくわかれ跡へ殘つた二個の娘お埋喜お友といひますを手ひとつで育てるうち縁あつてか娘等ハさる大家の婢女づとめ首尾の能のを僥倖に瀬戸の家をバ他に譲り一人の才を心當に此孑塚へ引移り纔に一稔を過るうち主家に大變さし起りてちり〴〵ばら〳〵になり行たまひ二個の處女の」[9] 行衛さへ定かに知れずに居りますゆゑ案じ煩ひ年を經しに此頃風に様子を聞バ娘等二個ハ以前住居し金澤へ身を落つけ細き煙りを立るよし夫から私が思ひ付た貴嬢方のお身の落付今お話語の様子でハ錦の御旗の盗人も鎌倉うちに居るハ必定そふして見ると鎌倉へ忍んで御籏を尋るにハ金澤ハよい隠家しかし出過た私の猿智惠おかしな婆とお笑ひなく若お心にかなひしなら認め置た此文を娘等にお渡しあらバ急度お世話をいたしませうト 言つゝ片側の苧桶の中より心の真実巻こめし文を手ばやく取出しいざとて」お梅

が前に置真心見ゆる言の葉を四婦ハ聞つゝ欣喜感しお梅ハ文を取りおさめて「今にはじめぬお前の深切其お言葉に隨がつて是から直に金澤の瀬戸とやらへ尋ね行二個の衆に會つた上何かの事をナア衆婦さん「なるほど夫が宜うござんす「そんなら直に旅立の「用意ハこゝにござんすト言つゝ取出す管笠草鞋「何から何まで抜目のなひ「お禮ハ言話に尽ませぬト言つゝ皆婦立あがり草鞋履手もかひ〳〵しくやがて戸口へ立出るを止めかねたる老女より四個も名殘のおしまるゝを思ひ直して菅笠に隱す涙の露草を蹈分ながら足早に南をさして辿り行く」[10]

第廿四回　清水を汲で義婦短刀を拾ふ　月夜を走て孝女孤忠を聞く

武州久良岐郡六浦の荘金澤ハ大道村耕地の西往來の右の方なる岩石に切り付たる地藏の鼻筋をかけて西を相州東を武州とす故に鼻かけ地藏またハ界の地藏ともいふなり鎌倉志に陰陽権介國道が東鑑を見るに六浦ハ鎌倉四境のうちに入りたるをもつて四境ハ則鎌倉といふべしとありしかれども凡例にハ金澤は武州にして相州にハあらず昔實時顕時居住ありてよりじつに一卿（ママ）のごとし亦金澤を家号とするも此時よりの事なりと」あり今この編に瀬戸の地を中央にとり是より次才に東西南北村々及び名所古跡をわかつものハ明神の勧請諸社諸山に先だつを以てなりまづ明神の前より西ハ六浦村大道村三艘村北ハ釜利谷村谷津村南ハ野島村東ハ洲崎村町屋村寺前村小柴村富岡村中里村氷取澤村是をすべて金沢十三ヶ村といふ其外ハ所々の小名にして一村にハあらず亦むかしより這金澤に西湖のおもむきありといふ其誦する詩歌も彼瀟湘の詩歌にして其作者ハ歌を藤原の為相卿詩ハ唐僧瑩玉澗なり其風景に比する名所ハ小泉を夜の雨とし。洲﨑を晴嵐。乙友を帰帆。平沔を落雁。野」[11]嶌を夕照。称名寺を晩鐘。瀬戸を穐月。内川を暮雪。とす此外に四景あり。瀬戸の二橋重山の春花。海上の落花。能見堂の晝。すべて是を十二景と言ふなりと云云（以上金沢名所杖に見えたり）時しも弥生の末なれバ四方の桜ハ咲乱れまん〳〵たる蒼海峨々たる高山春の景色を持ざるハなく君が嵜のひとつ松ハ霞こめて釣たるゝ扁舟濱西にたゞよふ眺望一時に尽しがたしさるほどにお梅青柳等の四賢女ハ尋塚の里をはなれてよりさして急ぐの旅にあらねバ名所古跡を遊覧しつゝ其うちにも錦の御旗の手がゝりもあるべきかと心を付て行ものから是ぞと思ふ事もなく翌日申の刻」過るころ同國金沢なる富士坂を越て能見堂の辺へいたりしかバ霎時這堂に立寄りて四方の風景をも一覧し且ハ遠路の疲労をも休めんと思ひにけれバいざとて四嬢諸倶に堂の檜椽に腰うちかけ這絶景を左右と余念もなく詠めて居り其時お安ハ後辺より進み出て人々に向ひ「あんまり景色の見事さにみなさんに噺さうと思ふ事さへわすれました其子細ハ他でもない私が今がた此跡の冨士坂を通るときしきりに咽が乾くゆゑ清水に口を潤を

さうと道の片側の山水を手にむすびつゝ吃んとするとき那方に茂りし小草のうちに一振りの短刀あり不思義に思ひ手を伸してとり」[12]あげ見るに表装も拙きものと見へざれバ抜はなしてよく〳〵見るに長さハ尺に足らずといへども抜羣の鋭刄ならんと思へバ流石に捨かねて落たる物を不拾と聖の道にハあるとか聞けども斯て朽んハ无益なり今さし當つて青柳さんの身に寸鉄もなきものを此短刀の主の出るまで須臾此方へ借りうけて今さし當る用に充んと思へバその侭携へて即寖にト言ひつゝも帯の間より取り出し青柳にわたすになん衆皆聞つゝ欣喜感じ今にはじめぬお安が奇才を歎賞のほかなかりけるその中に青柳ハ悦びの色面にあらはれ稍短刀を請とりつゝ幾回おし戴きてつく〴〵見つゝ不審氣にお安の「辺りへすゝみよりて〈何様も不審な此短刀表装を見ておしはかるに無銘なれども長船にて若刀尖から一寸手前に少しの瑕ハござんせぬ欤ト問はれてお安ハ驚きながら〈なるほどお前の察しの通り少しの瑕がござんすがそれを何様して青柳さんが〈サァ夫にハいろ〳〵子細のある事私の實の爺さんハ丸塚さまの元の老臣菊坂小六ともふすもの過し嘉吉の戰ひ破れ御家没落のその砌り爺さんの末期に及び私を側へ呼び寄せて遺言ありし其折に此短刀の事箇様〳〵と言はれた事を心にしめて片時忘れぬ這短刀ハ基丸塚家の重宝なりしを爺さんより三代先なる」[13]菊阪嘉門といふ人の時軍功によつて拜領あり夫より家の重宝として幾年月を送りしにお家没落のその以前讒者の爲に御不興を得て爺さんの休役の折短刀をさへ召あげられしに何人の手に落入しか其後行衛ハ知れずなりしを殘り惜しく思はれしにや繰り返しつゝ宣ひしに今はからずもお安さんの恵みに私の手に入たハ千万金にもまさつた賜物有難いとも嬉しいとも譬へる物ハござんせぬト言つゝ欣喜青柳の心を察してお梅等も倶に眉をぞひらきける却て物語りはてしかバ又もや余談におしうつりしばし疲労をやすめ居り其時八代ハ四辺を見まはすに堂の」**【挿絵第六図】**」[14]」那方の小高き所に遠眼鏡を掛置て詣づる人にハ放に見するよしを書付あるにぞ戯れに立寄りつゝ遠眼鏡を引よせ見るに間遥けき麓路よりして山川草木いへバさら也人家に烟の立るまで手に取るごとく見へにける浩る折しも宝藍染の単衣を上着にまとゐ管の小笠を手に持し旅装束のひとりの處女洲﨑の街を這方へと歩み來るありけるが八代ハ心ともなく熟々見るにはからんや那扇が谷家に身を寄せしお道にてありけれバ瞬もせず猶よく見るに終に姿ハ木隠れて往方も知らずなりにけり殘り惜しさハ限りなけれど斯て詮方もなきまゝにお梅」[15]青柳お安等に箇様〳〵と物語るにぞみな〳〵聞つゝ歎息してもし見ゆるかとかはる〴〵立寄りて覗き見れども影をだも見る事なけれバ終に望みをうしなひぬ折しもあれ青柳ハ心に浮しことやありけん人々にうち對ひ〈お梅さんや皆さんハ何様お思ひか知らなひが爰から麓の街までハ遥の道とハ言ながら心を揃へて急ぐなら若其人に逢ふことの千にひとつもあらうも知れぬ是にて思ひ合す

【挿絵第六図】

能見堂に四賢女風色を觀ず

れバ最前巷の風聲に合が谷の殿さまが此程鎌倉へ在着あり今日しも祈願の事ありて當所称名寺へ參詣あるよしそふして見るとお道さんもこゝらわたりを徘徊し」姿をやつし隙を窺ひ爺さんの怨を復し埋れし家を起さんと謀る事のなきとも言れず然ハ言へさきにお道さんハ一旦花の方の奥勤を許容されしうゑからハこゝらわたりを旅装束で歩行しやんす筈ハなひが是にハ子細のある事かそれかあらぬか不審しし何ハ兎もあれ麓へ下り若仇打の様子あらバ余所ながら力になり其うゑで何かの事を〳〵なるほどお前のお言の通り爰で彼是氣を揉ふより些もはやく麓の方へサァござんせトお梅が言葉誰か一議に及ぶべきみな〳〵即時に同意して能見堂を立出つゝ桙をさして辿りゆく不題花の」[16] 方の奥へ立入りし那お道ハ定正に近寄りて父の怨を復さんとおもひし甲斐もあら波に舩樓をくつがへされ御旗の行衛も知れざれバ花の方ハこゝろのうちに深くお道を怨み給ひ其日帰舘のあると其侭お道を前に喚出し今日の始末を云〻と言葉短かく言聞せ御旗の行衛鑿儀の爲とて身の暇を賜はりしかバ其所に望を失ひしかども扨詮方のなき侭にその夜初更の比及に合が谷の舘を出て兼て心を合せたるお理喜於友等の妮姉が住む金澤なる瀬戸をさして足を早めて行ほどに名に聞へたる朝比奈の切通しもはや過て大道村に」來し頃ハ稍子の剋にぞ近付ける斯る折しも後方より窺ひ〻〻來る者ありて近寄る侭にお道の袂を引止めつゝ小聲になり〳〵お道さまでハござゐませんかト言はれて驚き振りかへり木の

間をもれる薄月に顔すかし見て完尓わらひ〳〵誰かと思へバ其方お友何様して今頃此道を〳〵ハイ御不審ハさる事ながら兼て貴嬢の仰ゆゑ鎌倉の地を徘徊し賢女に會合ならバ道理を説て味方に招き合が谷家を打ほろぼし旦那さまのお怨みをかへさでやハ置うかと妬妧心を合せまして今日も那辺這辺まはりしゆゑ暮に及んで腰越より片瀬川へと」[17]參りし時箇様〳〵の事ありしト那お梅八代が船楼より小舩へ落入り片瀬川まで流れ來しをお安にたすけられしはじめより御簇の由来神夢の不思義またお梅八代お安等が身の上の事まで也立聞せしその跡にて御簇と片袖とすりかへし事一伍一什を物語り〳〵お聞の通りの子細なれバ那お梅等の三婦を味方になさバ貴嬢の片腕千万人の士卒より頼母しからんと思ひしゆゑ折を見あはせ言ひ寄らんと妬ハ直さま其場から三婦の跡をつけ私ハまた此御簇を折を見合せ些ともはやく貴嬢にお渡しもふそうと只今帰る此道でお目見いたすも不思」儀な僥倖シテまた貴嬢ハ何故にお供もなしに夜中此辺をお歩行あそばすト問はれてお道もありし事ども落もなく言聞すにぞお友ハしきりに歎息しつゝお道の心を察し遣り最便なくぞ思ひける

貞操婦女八賢誌三輯巻之三了」[18]了

楊太真遺傳　精製桐の箱入

處女香

一廻り　百二十文

そも〳〵此御薬ハ本朝無類の妙方にて男女に限らず顔の艶をうるはしくして生れ變りても出来がたき程に色を白くし肌目細になる功能ありしかしながら此類の薬世間に多く白粉洗粉化粧水其外油薬なとを製して皆こと〴〵く顔の薬になるおもむきを功能書にしるしてあれどもその書付の半分も功能なし依之此御披露を御覧じても久しいもの、弘口上など看消なし給ふべき事ならんがこれハなか〳〵左様に麁末なる薬にてハこれなく只一度用ひ給ふても忽ちに功能の顕れる妙薬なり一廻り用ひ給ひてハ御顔の」色自然と桜のごとくなり二廻り用ひ給はゞ如何様に荒症の肌目も羽二重絹のごとき手障りとなるのみならず○にきび○そばかす○腫物の跡○しみの類少しも跡なく治りてうるはしくなる事請合也○朝起て顔を洗ひこの玉粧香をすり込たまはゞ些も白粉を付たる様なる気色もなく只自然素兒の白くうるはしき様になれバ娘御方ハいふに不及年重し御方が用給ひても目に立ずして美くなる製法ゆゑ御疑ひなく御用ひ遊され真の美人となり給ふべし

為永春水精剤

髪の艶を出し髪垢をさる　妙薬　初みどり

このくすりハ髪を洗はずにあらひしよりもうつくしくなる　代三十六文

江戸數寄屋橋御門外弥左エ門町東側中程　文永堂　大嶋屋傳右衛門」

書物并繪入讀本所

賣弘所」丁付なし

貞操婦女八賢誌三輯巻之四

東都　狂訓亭主人編次

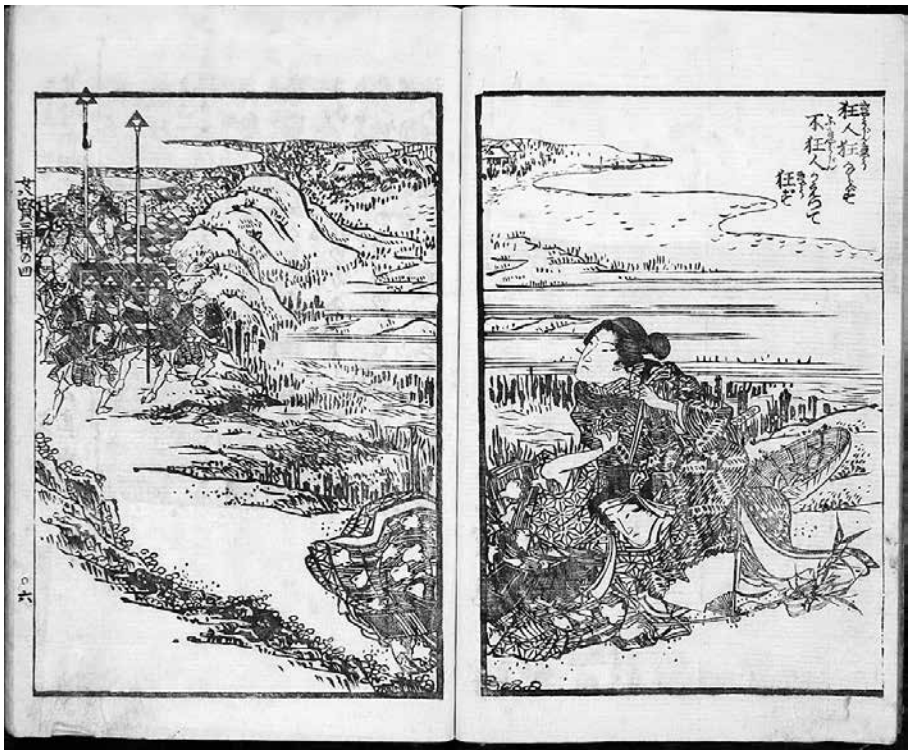
第廿五回

狂女大に騒す洲崎の晴嵐
定正暗に逃る平沔の暮雪

單表晉領扇が谷修理大夫定正ハ去る文明三年の秋聊の所労あるをもて鎌倉を舜し去りつ釆地なれバ上野の國白井に在城したりしに稍疾病の全快しかバ此ほど鎌倉に在着あり然るに定正祈願ありて歳毎に金沢なる称名寺へ詣るものから疾病に犯されて三歳がほども不參」せり心ならず思ふをもて這回在着のあると其侭餘事ハさしおき称名寺へ先參詣のあるべき旨市中ハ素より在郷まで最嚴重に觸られしかバ人々駭き思へども其日の夫役を逃るゝ道なくその准備をぞ爲たりける恁て文明六年の春弥生も念の七日なるが定正夥の供人を将て金澤山称名寺へ夙より參籠ありて其日申の刻過る頃鎌倉へとて帰還ある路次の歩みもいかめしく洲崎のこなたの松原を通りかゝりし折こそあれ誰れかハ知らず向ふより走りて此方へ來る者あり近寄る侭によく〳〵見れバ歳ハ廿才をまだ越へぬ婢からざる獨りの」[1] 乙女身にハ妙なる振袖を着て丈の黒髪振り乱し小笹の枝を携へ持しハ心乱れし婦女なるべし定正の行列へ面も振らず駈入るにぞ前走の雑色等駭きながら立寄りておし隔つゝ声ふり立晉領さまのお通りなるに无禮な婦女奴何所へか行く其所退ず

やとたしなむれども乙女ハ耳にも入たる体なく挑る士卒を打仆し又ハ蹴かへし突退て持たる小笹を打振〻〻獨り完尓〻〻笑ひながら定正の馬前近く寄るを寄せじと爭ふほどにはじめハ婦女と侮りしも今ハなか〳〵あしらひ兼て一個の乙女に雑色等ハさん〴〵に追立られもてあまし」たる其折しも這方に茂みし松蔭より立現れし一個の美嬢宝藍しぼりの單衣を上着に覆ひし旅粧装裾短なる出立なるが携へたりし管笠を遥に後方に投捨て今定正の行列を乱妨なせる狂女の側へつか〳〵と身を寄せて弱腰しつかと抱止るを那方ハ騒がず身をひねり振りほどき飛びか、つて持たる小笹をひらめかし打てか、れバ右左と身をかわしつ、つと寄りて組よと見へしが瞬間に狂女を下に組敷て准備の腰帯引解き其侭狂女をいましめつ、處女ハ聲を振りあげて皆さんかならず騒がれなはや曲者ハ捕へ」[2] しと言はれて人々欣喜つ又働きに駭きつァット感じて停ざりけり斯る時しも定正ハ馬上に在りて那是のありさまを得と見つ鐙際に従ふたる近臣何某を近付て如此〻〻と令するにぞ心得果て處女の側に歩み寄りつ、言話を正し如何なる人か知らねども斯乱妨なす白徒を處女の身にて捕へしハ天晴の働きなりと賞美のあまりに辱くも和女に對面為給はんと自ら晋領家の宣ふなり敏く此方へ參りてよと言はれて處女ハ欣喜つ、狂女を其侭引立て那近臣の跡に付き馬前間近く找むになん定正も馬より下りて道傍なる松蔭の芝生に床」几を建させて尻を掛つ、處女に對ひ今其方の働きを馬上ながらに一覧せしに處女の身にハ有がたき抜群の手並なり基より賤しき者にハあらじ隠ましからずハ和女の素性あからさまに言聞せよと問はれて處女ハ臆する色なく仰を返すハ憚りながら吾倩叉ハ當春よりお屋形の大奥へお側づとめに出ました道と喚る、不束者定めてお聞もございませう錦の御簾の叉につき在所をさがしに參れよとの仰をうけしその夜よりお屋形を立出て鎌倉の地ハいふに及ばず近きわたりの在々〻まで隈なく尋ね侍りしかども是ぞと思ふ手が、りなく」[3] 夫より武藏下總へとこ、ろざして參る道程が谷〔し〕駅に遠からぬ坂井木とかいふ峠にて計らず持病の癪に侵され麓の駅まで歩みがたさにある辻堂に立寄りて斯須苦痛を堪ぐうちはや日も暮て宵月も曇りがちなる薄闇に誰かハ知らず辻堂へ忍び寄り來る曲者あり様子如何と窺ふに腰に付たる盤纏を目がけ盗み取らんとする程に遣らじと爭ふ其折しも彼偸児の懐より落るハ慥に錦の旗と見るより手早く取上るを那方も白徒左右なく渡さず迭に引合ふ時しもあれ俄に降り出す村雨にあやめもわかずなるま、に」終に御簾ハ手に入りしかども路用を奪ひ去られしのみか偸児をさへ取逃し心殘りに思へども又詮術もなきま、に一旦お屋形へ立戻り是等のよしを稟あげ其後曲者の鑿穿をもいたしませうと思ふゆゑ其夜ハ程が谷に止宿をもとめ其所に一夜を明せしに兎に角痍の全快ねバ心ならずハ侍りしかども同所に両日逗留して今日なん巳の時過る頃旅宿を出つ、路次を急ぎ今がた當所に參りしに巷の噂を兼れバ君にハ祈願所称名寺に今朝より

【挿絵第七図】
狂人狂ならず不狂人かえつて狂ず



御參籠御在てはやお帰りとの様子ゆゑ御行列の美々敷を余所ながら
も拜まんと最前より」[4]して那方なる小松の蔭に身をひそめ君の通御
を俟ほどにお行列をも弁へず乱妨なせる白徒を見かねて拄ましたの
も出過た仕方とお咎めのあらんハ豫て知りながらもあまり不敵の
女ゆゑ思し召をも顧みず斯の通りでござゐますと実事虚戈うちま
ぜて一伍一什を譚る卑下せし言話を定正ハ實正なりと思ふにぞ些
も疑ふ氣色なく其勇力と明弁と且容貌の艶なるを見つゝいよ〳〵
嘆賞して扇を笏に小膝を找め天晴めでたき處女かな今日の働きのみ
ならで錦の簇さへ取かへせしとハ男子といふとも及びなし只怨むら
くハ」【挿絵第七図】」[5]其時に和女が持病に侵されずハ其偸児をも
捕へんに是のみ遺恨に思へども簇だに此方へ取置かバ偸児も又自然
と知れなん其一條ハ左まれ右まれ嚮より和女が様子を見るに力量
といひ才智といひ殊に容顔の孅弱なる一囲漢王に見參なバ忽傾國
の名を得るべし我ハ武帝に及ばずとも和女を李家の處女とするとも
誰かふさはしからずと言ん若我心のまに〳〵ならバ花の方にもよ
しを明し厚く目を掛使はんに和女が心ハ稲舩の否にあらずハ応を
せよいざ敏々と打解たる言話に駭き且耻てお道ハ顔をさと赤らめ
冥加にあまるお言話ハ」[6]身にあまる程有がたふも又嬉しふもご
ざゐますれど如何にせん奥さまより錦の御簇の盗賊を捕へて來よ
とたまさかに重き仰を蒙りながら假令御簇ハ手に入るとも盗賊を
捕へもせで爭おめ〳〵奥さまに何様御目見がなりませう夫ゆゑ

今ハお返応がと言ヘバ定正打頷きなるほど和女が言ふ所ひとつとして无理ならねバ一旦屋形へ誘ひ行き後兎も角もはからはん先携へ來し錦の籏を一覽せんと仰するにぞお道ハハット応つゝいそがはしく腰につけたる小包を打ひらき取出したる錦の籏をうや〳〵敷定正の床儿のほとりへ持行て跪きつゝ」件の御籏を進らするよと思ひの外隱し持たる懐釼を抜手も見せず定正の脇腹目掛て突かゝりしに定正運や宜かりけんお道の掌頸俄に乱れて股のあたりを突かする僅の浅痍と言ひながら思ひ寄らざる亙なれバ駭きながら後辺の方へ一間ばかり飛びしざるをこハ口惜と言ふ間もなく躍かゝつて一討と焦燥お道が必死の勢ひ咄嗟とばかり近臣等ハ主人の前に立ふさがり防くをお道ハ亙ともせず慍れる侭に聲はりあげきたなし定正敏く出て怨みの刄を試みよ斯言ふ吾侪ハ武藏の國氷川明神の神祗官渋谷典膳の」[7] 處女道今年積つて十八歳吾侪か父なる典膳ハ汝が爲に不意をうたれ非命に死したるのみならず所領をさへ奪はれし其无念さハ片時も忘るゝ間なき倶不戴天憂年月を送りしにはからず時をうどん花の春俟得たる今日只今汝に復す怨みの一太刀敏々うけよと言ひつゝも飛鳥の如くに走囘る其時這方に蹲踞し以前の狂女ハ身を起し空縄なるにや綁縛られたる彼腰帯を引はづし豫て准備の短刀を袖の中より取出してお道をさゝゆる扇が谷の士卒の中へ砍て入り吾侪を誰とか思ひつる最前狂女と見せたるハ汝」等を謀計ため實情ハ渋谷典膳さまの御恩に是まで成長たるお道さまのお腰元友と言ひしハ吾侪なるぞおのれ定正お主の仇思ひ知れやと言ひかけてお道と侶に尖刀を並べて砍込む勇婦の働き譬へバ餓たる虎をもて群羊を駈るごとく只この両女に砍立られ扇が谷の近臣等士卒も侶に辟易して備を立るに遑もなく我撃甾んと騒動のみ終に乱れて逃迷ふ其時晋領定正ハ薄痍に屈せぬ大将ゆゑ以前の馬に打跨り逃る自方を罵はけませども崩れ立たる碎なれバ爭か拄ゆる亙のなるべき雑兵等に」[8] 誘はれてみな逸足を蹈乱しつゝ逃るを両女ハ呼彼さゝ蓬なし返せ定正と言ひつゝ短刀打振さゝ一町ばかり追ふほどに何時の間にかハ日の暮て頃しも弥生の下旬なれバ宵闇なるに空さへもかき曇りたる雨催ひにお道等二女ハ便なく思へど尓とて少しも猶豫はず聲をかぎりに喚かけつゝ猶洩さじと追ふたりける恁る折しも片辺なる一叢茂りし藪蔭より顕れ出たる一手の軍勢整しく婦女武者なるが這那惣て廿名ばかり前面に找みし大将ハ歳も四十才をこよろぎの五十才にハまだ程遠きが丈の黒髪押切し姿ハ」殊勝に見ゆれとも心ハ猛き女丈夫准備の長刀脇挾み競ふて追ひ來るお道等両個をさへぎり甾めて一同に鬨を吐とぞ揚たりける

第廿六囘　道を拄て愛嬉一賢を檎す　鞘を返て義女孝婦に會す

再説お道等両個が今定正を追ひ撃んと競ひかゝりし向ふの方へ立あらはれたる一個の勇婦ハ稲村か崎の女隱居真間の愛嬉と喚るゝ

者にて定正はじめ花の方の心にも愜ふをもて今日なん称名寺の參籠にさへ伴れしと知られける」[9] 當下愛嬉ハ鼡聯綾の小袖の上に玄色縮緬の袿着したる其侭に裾小短く取あげて綾の鉢卷結び〆め白柄の長刀脇ばさみてお道をきつと白眼つゝ渋谷の乙女道とやら勿体なくも晉領さまを親の敵の仇人のと身の程知らぬもほどがある尓ハいへ和女が今の働き乙女に似氣なき大膽武勇若も今より心をあらため晉領さまへ降參なさバ命を助るのみならず功によりてハ身の立やう愛嬉が狄成爲やうほどに思ひ直して降參しや夫ともにまだ迷ひ覚ずハ此長刀の切味を見せてさまさせんと言はれてお道ハ慍りに得堪ず疾視」つめたる必死の覚悟に太刀取り直して些とも撓まずさてハ其方が聞及びし真間の愛嬉でありけるよな耳穢らはしき降參呼はり差出て怪我を爲様より道をひらいて敏通しや夫ともたつて拄ゆるなら先其方から一討にと言ひつゝ找む不敵の廣言憎さも憎しと愛嬉に従ふ惴りに惴りし婦女武者各手得物を引提さゝヤット被たる諸聲と倶に整く衝ひらめかす鎗長刀を後前に飛越反越ひるまず撓まずお友と侶に聲掛合ふて右にうけ又左りに流す至妙の働き當るに前なく目瞬間に六七個矢庭に命を隕しつゝ遺るも」[10] 痛痍を負はぬハなく忽地溌と乱れ立を両女ハ得たりとます〳〵找み愛嬉を目掛て撃て掛る折もこそあれ定正の近臣雑色打連て時分を計りかへし來つ准備の松明打振打振推捕稠て洩さじと力を合せて戦ふほどにお道お友の両勇婦もいよ〳〵心を励まして必死の働き撓むにあらねど嚮に洲崎の松原より今にいたりて一牌あまり奪戟突戦間なきのみか後詰自方のあるにもあらで僅に主従両女なれバ流石女子の氣労れして乱るゝ足を踏しめ〳〵戦ひ危ふく視へにける浩る所に片辺なる芒小笹の茂みより吐と」揚たる鬨の聲と侶に射出す多数の征箭に扇が谷の雑色等ハ射られて矢庭に五六人おなじ枕に仆るゝにぞ伏勢ありと思ひにけれバ駭き騒ぐをお道等ハ計らぬ援兵に力を得て尖刀するどく戦ふたり案下那方の笹原より顕れ出たる四個の美婦持たる弓箭をからりと投捨准備の短刀打振ながら扇か谷の多勢の中へ面もふらず砍入るハ是則 別人ならずお梅青柳八代お安の四賢女にてぞ有にける恁てお梅等の四賢女ハ四方八面に砍まはりてお道に力を合するにぞ愛嬉ハ是等の様子を視て自方をひそかに」[11] 招きて綽如此さゝと秘計をしめし五名ばかりを忍はせて其身ハ猶も諸軍に先立士卒等を罵勵ましつゝ那討捕れよ逃すなと嚴しく下知をなす程に多勢を憑む小卒等入乱れまた立代りて頻りに挑み戦ふものから宵闇なるに炬さへ打落されし叉なれバ敵味方の弁へなく心ならずも同士撃して空に命を隕すもあり尓バお梅等四賢女も於道お友の両勇婦も東方西方と走囲りて別々になりしかども些ともひるむ氣色なく千変万化の秘術を尽し嘯嘖で撃合突合頻りに捷に乗るほどに扇が谷の軍兵等ハこの」勢ひに碎易して早にこらへず皆諸侶に人碎撲てぞ崩れしかバ六個の勇婦ハいよ〳〵找みてお梅八代お友の三個ハ扇が谷の近臣等を追ひ撃んと走行バ青柳お道の二

賢女ハ愛嬉を追ひつゝ二町三町或ひハ四五町五六町よき程に追ひ捨て定正をもらせしうゑハ尓のみ戦ひを好むにあらねバ早くも迹を瞞ましつ己が隨意退きける其中にお安一個ハ始めよりして衆に先立敵の迯るを追ふほどにあやめもわかぬ闇なれバ十町あまりも來しと思ふに敵ハ早くも落失たりけん四辺に近き人音なけれバ了に望みをうしなふて残り惜し氣にイみ居しが斯て」[12] 止べきにあらざれバ元來し道へと踵を囲らし豫て約せし瀬戸村をこゝろざしつゝ行折しも思ひがけなき薮蔭よりヤット掛たる聲と侶に投出したる鍵縄に引かへされて仆るれバ忽地出る多數の夥兵おりかさなりつゝお安をおさへ終に縄をぞ掛たりける可憐お安が薄命此末憂目にあふや否や今這囲にしも説尽さず开ハ後の囲りに委しからん閑話休題つお道ハ計らず援兵を得て難なく敵を追ひしりぞけつ一旦爰を立退て折を見合せ定正を撃て本意を遂なんと思ふものからお友にさへ別れて行衛の知れざれバはや此所を落失しが若撃れしかと右つ左つ思」按に首を傾けても如方暗夜の夏なれバ尋ねんとする便もなく其うゑ放心さゝ〳〵此辺に居て扇が谷の大軍の再度おし寄せ來りなバ戦ひ労れし身ひとつもて這囲〔こたび〕ハ防ぎとめ難し今定正を撃得ぬのみか此身をさへに失はゞ智なき者とや笑れん時を俟こそよからめと肚に問ひ肚に応へて案内知つたる道なれバ闇にも迷はず徐々と瀬戸河原なる隠家を目當に道を急ぎつゝはや程近き明神の杜の這方に來し折しも迹より窺ふ曲者あり。とも知らずして行過るを那曲者ハすかし見てお道のさしたる短刀の鐺をしつかと握りとめ」[13] 氷川の神職 渋谷が處女何れへ迯るかマア待ちやと言はれてお道ハ些とも騒がず静に後方を見かへりて誰かハ知らぬが入らざる腕立出過て後悔せぬ様に其所放しやいのと言ひつゝも身をひねつて振ほどくを曲者ハ猶放放さじと鐺を握りし其侭にて些とも動かぬ大力にお道ハ駭き且怒りてエイヤと引バエイヤと引くはづみにお道の短刀ハ差たるまゝにすらりと抜けてお道ハ前へ曲者ハ鞘を片手に握りしまゝ後の方へたぢ〳〵と二足三足よろめくを得たりとお道ハ此間に片辺の小草に身を隠し其侭行衛ハ知れずなりぬ其時件の曲者ハ」**【挿絵第八図】**」[14] 最本意なげにイみて跡見送りつゝ數多嘆息してぞ居たりしが心にそれと点頭て瀬戸の方へと走りゆく前話不題武藏の國久良岐郡金澤なる瀬戸村の片辺りに藁の一棟最低〔ひくき〕く古びし杉の生垣にからげ付たる枝折戸ハ浮世に不楽隠家と言はでも知れし住居なり折しもあれ那お道ハ曲者と挑みしとき習ひ覚えし術をもて其場を遁れ去りつゝも稍此庵に來しほとに四辺見まはし枝折戸を卒度おし明つゝ内に入りて勝手おぼへし夏なれバ暗きにまよはずかゝぐり〳〵火桶の側へ這ひ寄りて火箸の先もて埋火を」[15] 掘り出しつゝ附木にうつして先燈火を照し置き懐よりして父典膳の位牌を取り出し佛檀へうや〳〵しく備へつゝ遥か下つて手をつかへモシ父上さま嘸御无念でござんせう其御无念がはらしたさに千辛万苦に月日を經へて今日といふ今日定正を計りおふせて一撃にと思ひし夏も奈末與美の腕の乱れに

【挿絵第八図】
青柳再びお道を試す

思はずも聊痍疵を負せしのみにて不覚をとりし口惜さ夫のみならず片腕とも憑みしお友ハ行衛知れず今まで此家へ帰らぬハ若乱軍の中にしも可惜命を隕せしか心がゝりハ夫のみならで最前数多の兵士等に捕圍まれてお友と二個既に」戦ひ労れしかバ危ふかりしを倖いに援けられたる四個の女中何所の人ぞと問ひもせず禮さへ言はれぬ必死の場所ゆゑ早にその俣別れしが奈何なりけん氣掛りなと言ひつゝ外面を見やりつゝほろりとこぼす一雫の涙に實情あらはるゝ孝女の心を哀れとも知る人ぞなき一家に綷訪ふハ只松風のみ最物凄く更渡る其時お道ハ父の位牌と腰に結びし錦の簇を倶に佛壇の中に納めて嚮より片辺に置たりし鞘なき短刀を手に取り上げつく〴〵見つゝ訝し氣に•合点のゆかぬハ先刻の曲者暗き夜なれバ夫ぞともたしかに姿ハ見とめねど婦女に似氣なき」[16] 不敵者ゆゑ那を相手に間取りて大軍再度寄せ來らハその時こそハ防ぎがたし大叉の前の小叉ぞと思ふて其場ハ遁れしかども父上さまの遺物ぞと片時放さぬ短刀のと言ふ時那方の垣間より•其鞘是にござんすと言ひつゝ立出る一個の乙女おめたる色なく枝折戸を明て毋屋の椽側へ找み登るをお道ハ見つゝ打駭きしが又更に處女の顔を熟視て•其方ハ最前明神の杜で出合ひし曲者ならずや嚮の手並に懲もせで爰まで來しハ夏虫の火に寄るより果敢なきを知らで命を捨に來しか卒手の内を知らせんと言ひつゝ苛急て擊んと」找むを拄とゞめたる腕と侶に這方ハ速くも聲をかけ•マア待しやんせお道さん吾侪が此所へ參つ

たも種々〳〵深い子細ある事先其刃をおさめてよと言はれてお道ハ訝かしながら先短刀を片辺に置き處女の顔を右視左視て•合点の行ぬ今の言話吾侭の名まで知つたる和女ハ•サア其不審ハ道理ながら吾侭ハお前と宿因ある菊坂小六の娘青柳定めて覚へがござんせう云る七月の念の五日その日も丁度霄闇の星さへ暗き雨空に圖塚山の藪蔭にてお袖さんの必死の難をと言へバお道も打頷き•計らず助けて妮妧の名乗をしたる吾侭の嬉しさ•迭に」[17] 積るお的話に親身の実情ハ見へながら邂逅會ふた妧公の願ひも愜へず錦の簇を手蔓に敵へ近寄つて親公の仇を報はんとハ寔に得がたい孝女の操•其折後方に聞人のありとも知らねバ身のうゑの一伍一什を物がたる時しも片辺に仆れたる痍負の悪女が窺ひ寄り吾侭の所持なす御簇をバ取るを遣らじと争ふうち御簇ハさつと引解け•現はれ出たる雲に龍夜目にも夫と視しゆゑに取りかへさんと思へどもあやなき闇に途をうしなひ•争ふはづみに突あたり可憐や妧ハ深谷の底へ落て行衛ハしら〳〵とはや明近き月代に•顔見合せて這方」より名乗掛んと思ふうち不思義の術にお前の姿本意なく其場で見失ひ残り惜しさを今爰で再會しもつきせぬ奇縁•そんなら最前明神の杜で出會し曲者も•やつはり吾侭が戯れにお前の心をひき見るため•そふとハ知らず今までも心にかゝりし短刀の•鞘ハ爰にと青柳が懐よりして取り出すをハ道ハ受取完尓と迭ひに笑ふ美人と美人猶這囲ハ長けれども此巻にしも説尽されねハ斯須爰に筆をとゞむ开ハ又後囲に分解を听ねかし

貞操婦女八賢誌三輯巻之四了」[18]

貞操婦女八賢誌三輯巻之五

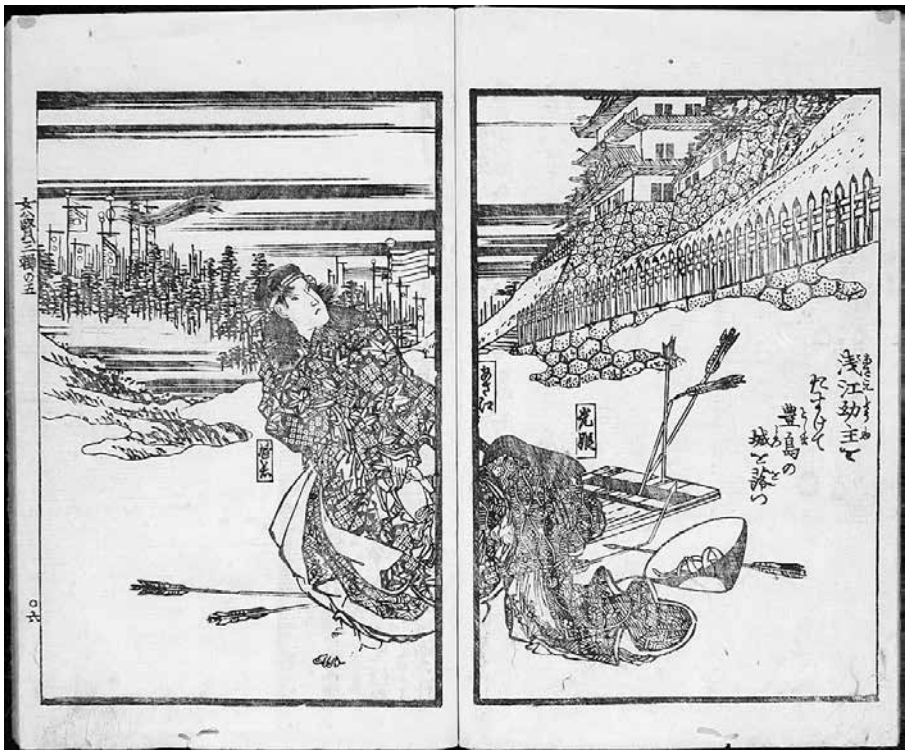
東都　狂訓亭主人編次

第廿七囲　佛縁を現して青柳一賢を説く　夥兵を刺して阿力義忠を誼ぶ

當下這所へ來かゝるハいとも怪しき一個の修行者単木綿の單衣の裾小短く取りあげておなじ色なる脚半甲掛藺織笠もて面を隱し鮮やかなる笈を背負て折戸のほとりに身を寄せつゝ裡面の様子を窺ふに今青柳とお道との問荅ほのかに聞へしかバ駭きながらも左右なく入らず竊足しつゝ近」寄りて椽側の這方なる生垣の間に身をひそめ猶も様子を聞て居り裡面にハ二個が夫ぞとも神ならぬ身の知るよしなけれバお道ハ短刀の鞘を受取り先其刃をおさめつゝ心ありげなお前の言話然どもお前と吾侭とハ聊由縁のありとも知らで況て過世の縁ありとハ心得がたきお前のお的話是にハ何ぞ子細あらん奈何さゝと疑問バ青柳完尓と打笑て其疑ひハ尓る叟ながらお前も覚へてござんせう思ひ出せハ去年の秋所も戸田の川舩でお前ハ神子さん吾侭ハ順禮鈍くも老女に欺かれ不覚の綁縛に引るゝ道お前ハ不思義の妙術にて逃れし跡ハ吾侭」[1] ひとり奈何なる憂目に

逢ふ支かと思ひの外に計らずも引る、先ハ神宮なる那藪中山満化寺にてお斉の尼に見參なし始て聞し過世の因縁其子細ハ他ならず去る長録初の年豊嶋の家に内乱起り奸臣了に時を得て國家をさへに横領なし剰へお家の正統なる光姫さま（始路姫に作りしハ誤り なり以後惣て光姫に作る）と鳩若さまを殺害なさんと計りしを光姫さまの乳母なる浅江と喚れし忠義の女中速くも其機を推せしかバ密に両君（光姫 鳩若）伴ひて武藏下総の間に忍ばせ其身ハ自ら尼となりお斉の此丘と法名なし躍念佛に支寄せて再び豊」嶋家興立の自方を集る今最中お斉の尼となられし事只此一條のみならず其昔豊嶋家にて一木を以て八體を作りなしたる弥陀佛あり信仰殊に厚かりしに豊嶋家内乱の時に臨みて忽然として失たりき不思義といふハ是のみならでお斉の尼の仮寐の夢に彼八體の阿弥陀佛現然と立給ひ汝豊嶋家再興の赤心尤も賞すべし吾八體も豊嶋家に深き因のあるをもて當家の衰亡を見るに忍ひず須臾佛身をひるがへし人間界に生をなし八個の乙女と化現して當家再興の力を尽さんゆめ〳〵疑ふ支なかれと宣ふ程に」[2] 夢覚たり夫よりしてお斉の尼ハいよ、ます〳〵佛恩の辱を思ふをもて道德堅固の尼僧となり爭で件の八賢女を尋ね出して自方となし豊嶋の家を再興せんと豫て自得の神占にて種々在所を卜ひしにいまだ時運の到らねバ八個爰に俱足せねども一木をもつて造りたる弥陀の化身であるものを迭ひに親ハ異るとも過世を言はゞ妮妹同然躯て八賢俱足して心を一ツに當家を佐ん和女も豊嶋に由緒ある丸塚殿の浪人の處女のみかハ八個の一個と喚るゝ上からハ今より八個の在家をもとめ一日もはやく豊嶋家を再び」興す計呉々憑むハ此支なり又彼捕へし田舎神女もおなじ賢女の一個なれども那ハ心に願ひあれバ奇術を以て遁れしならん尓れども因あり縁あれバ再會ハ猶遠からじと最委細なる尼君の仰に駭く此身の素性今佛縁を身にうけて其名の爰に知れたる者お前と吾侪のみならずまだ此他に三個あり其一個ハお前の妹公お袖さんの結髪梅太郎とハ仮の名にて實情ハ豊嶋の忠臣なりし神宮秀齊の處女お梅次ハ八代次ハお安と一個〳〵の身のうゑと其身の支さへ取まぜて一伍一什を如此さと支落もなく物語れバ」[3] お道ハ倩聞了て思はず小膝をはたと打ち侪ハ日外戸田川の小舩で逢ひしもお前にて那とき悪婦とおもひたる彼舩長も尼君のやつぱり私等二個をバ誘はんとの支なりしかとも知らざれバ願ひある此身を賊手に囚はれてハ思ひ立たる仇討の其宿願も悋はねバ奇術をもつて身を遁れしが今のお前のお的話ではじめて知つた吾侪の身のうへ恁まで勝れし人々に過世の縁のあらんとハ計らざりける今霄の嬉しさ夫にて思ひ合すれバ心當りがござんすと那のお友より聞たりし片瀬川にての縡の來由其時御旗を」奪ひし事夫よりしてお理喜ハお梅等三個を賢婦ぞと思ふをもて會て自方に憑まんと跡を慕ふて行しのみ今日まで音信のなかりし事またお道ハ錦の旗の再び手に入る支を得てお友と計りて定正を覘ひ撃んとせしほどに思はずも腕の乱れにはからぬ不覚を取りたりしに又計らざる援を得て今爰

【挿絵第九図】
浅江幼主をたすけて豊島城を落つ



に及びし支まで綷如此〻〻と報知にぞ青柳ハ聞毎にあるひハ駭き又ハ感じて頻に膝をすゝめける其時お道ハ佛檀より以前の御簇を取出して貌ちをあらため言話を正し寔に得がたい今霄のお的話假令過」[4]世の因縁なくとも恁まで義ある賢女等を知らで御簇をしば〳〵奪ひ物思はせしのみならずお前とさへも両三度讐敵の思ひをせしハ吾身ながらも鈍ましやと最面なげに賠話にぞ青柳聞つゝ打けして アレ お道さん其様な心づかひハ入らぬ支互ひに因みを結ぶからハ親こそ異れ替らぬハ妮妙遠慮のないが隔ぬ心此末ともに吉につけ凶きにつけて何支も心を合せ相談して豊嶋の家の再興をと言へバお道も打点頭なるほど嬉しひお前のお言話夫につけてもお梅さん等ハ何故此家へハござんせぬやら心がゝりハ是のみならでお友ハいかにせし支」**【挿絵第九図】**」[5]」ぞとお道が言へバ青柳も倶に案じる胸と胸互ひに顔を見合せて思ひかねてぞ居たりしがお道ハきつと心付きお前ハ何と思ふか知らねど此地ハ鎌倉へ遠からねども人煙少に山多ければ若や闇路に踏まよひあられぬ方へ往もされしか夫にても心得ぬハ勝手覚へしお友さへいまだ此家へ帰らぬハ是も又訝しゝ且定正の追手の軍兵再び推寄せ來る支ありて不思義の災ひなしとも言はれず开も其侭に打捨て爰にて物を思はんより這等あたりを那此と隈なく尋ねて伴ひ來らん誘もろともにと言ひつゝも短刀を腰に跨へ錦の簇を」[6] 携へていそがはしく身を超せバ青柳もまた其意にしたがひ立あがらんとする折しも何時の間にか

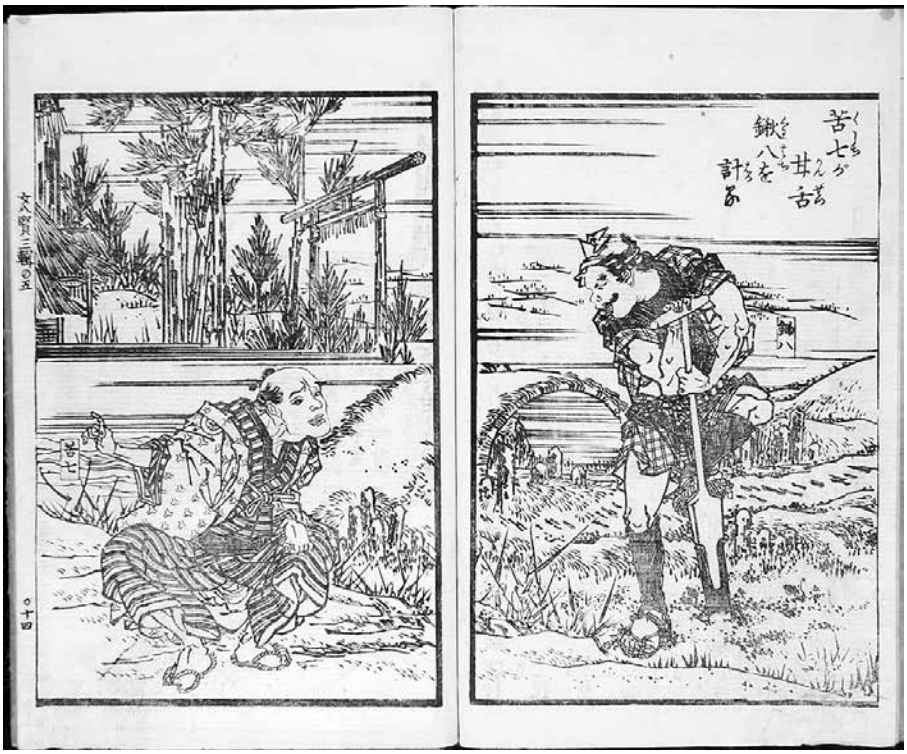
ハ忍び入りけん黒装束せし四個の夥兵椽の下より這ひ出てお道青柳の二個を目掛持たる十手を打振〻ヤット掛たる聲と侶に双方整しく組付を二婦ハ騒がずふりはなし准備の短刀抜手も見せず右と左に二個の夥兵を水もたまらず撃下るを猶懲ずまに近寄る二個ェ、面倒なと青柳お道襟がみ取つて三間ばかり外面の方へ投付たり尓ども屈せぬ二個の夥兵勇婦に投付られながらも猶起上りて組つかんと」蠢きまはる其所へ表の方より背戸口より走り出たる二個の婦女件の夥兵が起んとするを起しもやらず押伏て懐劔抜持差通すをお道ハ駭き是を見るに一婦ハお友今一婦ハ修行者姿に出立ども是なんお友が姉なりしお理喜にてぞありにける斯る折しも納戸の方よりアット誉たる聲と侶に仕切の襖押明て徐々入來る八代お梅完尓笑ふて坐につくを視るよりお道も青柳もあまりの亥に駭き呆れ是ハ〳〵とばかりにて須臾言語もあらざりける案下お梅と八代ハお道に對ひて貌を正し互ひに口誼の果し後お梅ハしづかに小膝を找め嚮にハ」[7]火急の場所なるに暗さハ暗し敵ハ大勢了に六個が六所へ散々になりゆきしに八代さんと吾侪とハ始めよりして扇が谷の士卒に對ひて戦ひしが二町ばかり追ふほどに速くも敵ハ逃失しかバ恁て猶豫する場所ならずと八代さんと諸侶に瀬戸村さして來る道にて是なるお友に喚ひ岀られ駭きながら様子を聞くに日外多塚の一家にて老女のおしへし瀬戸村の其妩妙の一個なるよし嬉しさハ只是のみならで日頃尋ぬるお道さんさへやつぱり瀬戸の一家に忍びて在することのよし聞とひとしく八代」さんも吾侪も侶に小躍して夫よりお友をしるべに立嚮に此家へ來つ、見るに青柳さんハ急速くも這所に在するのみならずお道さんとの問荅最中様子奈何と思ふゆゑひそかに背戸の方より廻り納戸の中に忍び居て残らず洩れ聞く始終のお的話それに付ても氣がゝりハお安さんの身の行衛今まで爰へござんせぬハ若も撃れハ爲給はぬか夫かあらぬか奈何やと言へハお道も青柳も八代も又お友等も互ひに眼と眼を見合すのみ思ひかねてぞ居たりける其中に彼お理喜ハ夥兵の死骸を片辺にかひやりお梅青柳八代に先初對」[8]面の禮を誼次にお道に打對ひ吾侪亥ハ過し日に片瀬川にてお友に別れお梅さま等のお跡を追ひ折もあらバお道さまの思し召しをバ言鮮て自方にお勧めもふそうと夛塚村まで參りしに青柳さまの危急の御様子夫ゆゑにこそお二個八代お安ハ袖乞とまで身をやつし神宮屋夫婦と大六どのを欺きおふせて青柳さまをお救ひなさる思し召と推せしゆゑに其夜ひそかに大六どの、邸に間近き小笹の中に身をひそめ様子奈何と窺ひしに按に遠はずお二個が青柳様を伴ふて邸をお逃れなさる、まで始終の様子を見定めしが」若大六が心付追手をかけんも計られねハ須臾其場に忍び居て猶も様子を窺ひしに大六ハ唯一筋に神宮屋夫婦が所爲と思へバ直さま人数を催ふして自ら神宮屋へ走向ひ家内残らず砍尽してお三個をバ捕かへさんと最愚かにも打立にぞ其時までも吾侪ハ小笹の中に忍び居しかこ、ろの裏に思ふやう今大六が神宮屋へ夛勢をもつて押寄せて家内残ら

ず砕尽すともお三個の在所知れねバ再び諸方へ手分して捕へんとこそ計るならめ尓するときにハ皆さまの御身に禍ひなしとも言はれす奈何も計りて大六に追手を」[9] 出させぬ一趣向はて何がなと種々に獨り思按をめぐらせしにひとつの苦計を新作意那大六が神宮屋へ自ら発向し其跡にてひそかに邸へ忍び入り家の後園に積貯へたる山にひとしき秣の中へ時分を計りて火を放せしに折から夜風のはげしくて猛火盛んに燃あがるにぞ按に遠はす大六ハ放火に膽をや冷しけんお三個のお行衛さへ鑿穿するに間なく只いたつらに神宮屋の家内を残らず砕尽せしのみ人数を邸へ引揚しかバ其間に吾侭ハ豫て便りハ聞ながら絶て久しく逢はざりし母の住居へ尋ねゆき様子を聞け〔ば〕」皆さまにハ今がた此家をお立ありて吾侭どもの隠家へお越しありしと聞しより夫にて些ハ心安堵其夜ハ母と語り明して翌日巳の牌過る頃知縣には、かりなきにもあらねバ修行者姿に身をやつし那地を發足なしつゝも嚮に當地へ參り着しに巷の人の噂を聞くに洲﨑のあなたの松原にて管領さまの行列を乱妨なせる婦女ありて今戦ひの最中と聞に胸まづ轟て急ぎ洲﨑へ到らんとする道の程にて日ハ暮つ宵闇なれども覚へし道ゆゑ足に任せて行着しにはや戦ひハ果し後にて四辺に人氣もあら」[10] 〔ママ〕あらざれバ本意なく那処を立去りて此家へ來つゝ計らずもお道さまと青柳さまの迭に積るお的話を洩聞のみか今爰でお梅さま方お両女にもお目にかゝりし吾侭の欣喜是に増ものなしと赤心あらはす言の葉にみな〳〵感嘆為たりける

第廿八回　瀬戸の暁天に於道秘書を焼く　客路の暮堤に恶僕愚直を欺く

案下お梅ハ默然としてお理喜が的話を聞居たりしに稍あつて首をもたげ寔に恶の其身に報ふ今にはじめぬ」叉ながら那神宮屋の渾家といふハ現在吾侭の伯母なれども素より心頑にて夫の恶を諌ハせず却て恶事を伎倆しゆゑ早に其身を大六が非道の刄に失ひし事自業自得といひながら假令吾侭に難面とも血筋ハ絶ぬ伯母なるをおもへバいとゞ愁傷とほろりと飜す一雫の泪に現す賢女の操感ずる中にも八代ハ四辺にきつと氣を配り皆さん何とか思はんす今まで千草に啼連し耳姦しき蛙の聲一時に止しも心得ず若や此家へ敵兵のひそかに押寄來しものか尓も有バあれ今爰で六女が必死をきはめなバ怕るゝにしも足らねども」[11] 唯氣がゝりハお安さん今まで此所へもござんせぬハ奈何なりゆき給ひしか何ハ兎もあれ此家を立去り行衛を尋ね諸侭に何れの國へか逃れ去らずハ不思義の禍ひなしとも言れじ皆さん奈何に思はんすと言はれてお梅も青柳も尤もと氣の付く其中にお道ハ屡々打点頭吾侭の危急を救はんと夥の敵に砕入りて其後行衛の知れずといふお安さんをバ其侭に片時打捨置がたし去來さらバ諸侭にと言つゝ立しが又更に片辺に置し錦の籏をうや〳〵敷手に取りあげお梅に渡して偖いふやう昨日までも今日までも

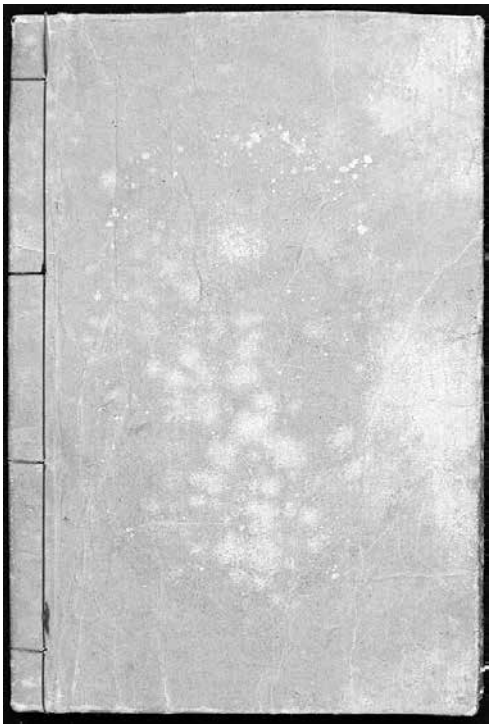
【挿絵第十図】
苦七が甘舌鍬八を計る



只一筋に」爺さんの讐とし思ふ定正を撃果さんと思ふにより他の寶と知りながら屡々御旗を奪ひし事今さら悔ひても其詮なし夫を憎しとて捨られず恁も賢れし人々に因みを結びしうゑからハ讐を撃日のなくてや果ん尓すれバ此身に自得せし竒術も今ハありて益なし素よりかゝる幻術ハ人の耳目を迷すのみにて仁義を守る真勇婦の深くも耻る所爲なれバ今あらためて術をかへし再び用ゆる叉あらしと言ひつゝ豫て懐中に秘置たりし竒術の書を出せバお理喜もまたお友もおなじく取り出す忍術の秘書を」[12]お道ハ受取りて皆諸侶に片辺なる圍爐裏の中へ投込むにぞ時しも吹來る夜嵐にさつと燃立一焔の猛火と侶に件の秘書ハ煙りとなりてぞ失にける斯る折しも外の方より俄に起る陣鐘と侶に聞ゆる鬨の聲に這方ハ覚期の四賢女二勇婦敵に合ふてハ面倒と身繕ひしつ背戸口よりひそかに忍びて立出しハ最も危ふき叉になん話説分両頭偖も多塚の里長なりし杢兵衛が處女お竹ハ思ひ寄らずも大六に家財残らず闕所せられ其身も早に捕はれしを又計らずも青柳の輔に其場を逃れつゝ那鍬八に」【挿絵第十図】」[13]」伴なはれ指て行べき當ハなけれと須臾も猶豫するところにあらねバ兄梅太郎が鎌倉へ行と聞しを心當に相模路さして趣しに倖なき時とて途中にてお竹ハ俄に病ひに侵され一歩とても歩行得ねバ鍬八ハ〳〵駭き恁てハなか〳〵此侭にて鎌倉までハ行がたしとハ言へ這辺に放心〳〵して若も追隊に出合なバ其時逃るゝ道ハなしと千々に心ハくだけども力づくでも及ばぬのハ世にいふ主

と病にて是非なく其地の旅店を憑み奥の一院を借受つゝお竹を其所に忍はせて種々医療を尽せども左に右急快の験なく」[14] 空く阴阳を經るほどに速くも秋過冬去りて其年も了に暮つ明れバ文明六年の春もなかばに及びしかどもお竹ハ枕に臥たるのみ重るといふにハあらねども頓に全快様子なければ鍬八ハたゞ手ひとつにて看病怠る亙ハなけれど這地に足を止めてよりはや八月にもなりしかバ盤纏も今ハ残り少なく尓ども追隊の沙汰なけれバ夫のみすこしハ心易く其次の日より鍬八ハ近き四辺の百姓に昼ハ終日雇われて僅の錢を貰ひつゝ薬と旅龍の料に足し夜ハ終夜 看病して須臾も撓ぬ赤心ハ最有がたき老僧なり不題爰にまたおなじ多塚の」里なりし那神宮屋の奴僕苦七ハ嚮に平左衛門が言話に随かひ戸田河原より袖乞をひそかに誘ひ來りしかバ定めて夥の褒美あらんと思ひの外に其沙汰もなく只口禁をされたるのみ鐚壱文にもありつかねバ苦七ハ心中心よからず尓ども爲べき様もなくて徒亙となりゆきしに其夜俄に郡舘より大六 自 走向ひて夫婦をはじめ家内の者を残りなく砍尽せしとき苦七ハ奸智に闌たる者ゆゑひそかに床下へ忍び入りからく命を助かりても身に半錢の貯へもなく此侭にてハ何國へも走りがたしと思へども當所に長居もおそれあれバ夫より直さま相模路へと」[15] 心ざしつゝ往道にて圖視れバ片辺の田の畔にて余跡目もふらず耕作者あり近寄るまゝによく〳〵視れバ豈計らんや豫て知る荘官杢兵衛が家の老僕鍬八にてぞありけれバ偖ハ這奴お竹を伴ひ此辺あたりに忍び居てかゝる所爲をもなすならん然すれバ青柳梅太郎また彼両婦の袖乞も此辺に忍びて居るものか基大六が神宮屋を乱妨なせし起りといふハ那青柳等が逃たる故にて他に子細のありとも知らねバ今鍬八をひそかに欺き那等が在家を聞出し搦め補て伴ひ行バそれを功に神宮屋の跡式ハみな吾物ならんと忽地奸計を新作意躯て」件の鍬八が辺りへ近く找み寄り夫にござるハ多塚なる鍬八どのにハあらずやと言かけられて鍬八ハ打駭きつゝ見かへりて尓宣ふ神宮屋なる苦七叟で在するかと言へバ這方も打点頭いかにも吾們ハ苦七なりおん身と吾とハ其以前より久しき馴染でありつるに去る七月の騒動に速くもおん身ハ嬢さま お竹を救ひ出して逃られたる後何國に忍び在するとも風の便りも聞ざりしに偖ハ這辺に世を忍びてと言れてはつと鍬八が輪胸ハ有や无やの関に人目を忍ぶ身ハ包とすれど顕はるゝ目色をさとる奸智の苦七打含笑つゝ小膝を」[16] 找め鍬八どのよ尓ばかりに駭き給ふも人にぞ寄る假令吾們が聞たりとも知らぬ振して通すのが其所が豫ての念頃だけ包も程のあるものなり然ハ言へ日頃腹悪き神宮屋夫婦に使はるゝ吾們なるゆゑ其様に疑はるゝも道理ながらおん身も這辺に在すれバ在所の様子も聞れしならんが昨夜俄かに神宮屋へ子細ハ何か知らねどもお知縣の大六さま多くの夥兵を引俱して案内もなく撃て入り旦那夫婦ハいふに及ず家内の者ども残りなく砍尽されし其中に吾們ひとりハ運よくも不思義に命を助かりて爰まで逃てハ來しなれども」盤纏の貯へとてもなく况て行べき

先もなけれバ此所よりおん身の住給ふ方へ吾們を伴なふて此場の難義を救ひ給はゞ報知まいらする一言あり其子細ハ他ならねども豫ておん身も知らるゝ通りお知縣の非道なる情といふてハ露程もなく尓のみ咎なき神宮屋さへ聞るゝ通りの仕合せなれバ梅太郎さま御兄才且青柳とか喚るゝ乙女の鑿義ハ今もいよ〳〵嚴しくおん身這辺に忍び居て今日まで追隊に出合はざるハ倖ひにして遁れしなり然るに吾們ハ主に放れ他に寄辺もなき身なるにおん身と旧きよしみもあれバ今より」[17] おん身と心を合せお竹さまをバ何れにまれ遠き方へ伴ひゆき其所に斯須忍ばせて折を見合せお地頭へお知縣の非道を訴へ理非明白にあらはれなバ神宮と荘官の両家をバ以前のごとく取立て約束なれバ神宮屋へ梅太郎さまを養子となしお袖さまと娶合なバ那嬢の願ひの叶ふのみか亡お旦那（平方衛門夫婦をいふ）も本意ならん又お竹さまハ何れにても能き聟さまを撰みむかへて杢兵衛さまの跡を立なバ双方全き支を得て箇程芽出度支ハあらじと口から出るまゝ弁に任せて實しやかに説惑はすにぞ正直一圖の鍬八」なれバ始の程ハ疑ひしが早に伎倆の罠に落てお竹が病氣の支の来由今猶旅店にある支まで一伍一什を譚るにぞ苦七ハ心中密かによろこびはや謀計成就しぬと思ふものから色にも出さで躱て鍬八に誘はれ彼旅店にぞ到りける必竟苦七が計得て又甚麽なる支をかなす开ハ次の巻に分解を听ねかし

貞操婦女八賢誌三輯巻之五終」[18]

【後ろ表紙】